

「心の除染」という虚構

黒川祥子・著

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

はじめに

2015年8月、東京都あきる野市郊外。武蔵引田駅むさしひきだから歩いて十分ほどにある教会を拠点に、福島の子どもたちの保養キャンプが行われていた。

「ここ、ほんとに東京なの？」

子どもたちの率直な感想はもつともだった。ビルとも騒音とも無縁な、見渡す限りの田園地帯。草いきれが立ち込め、したた滴るような緑に囲まれた一帯は、日が沈めば、あつという間に闇に覆われ、しんとした静けさに包まれた。

ここに宿泊して3日間、子どもたちは山や川や公園で遊ぶのだ。放射能の影響のない自然のなかで思う存分に過ごす――、保養は汚染地で暮らす子どもにとって必要なことであり、心身の健康によいことは、チェルノブイリの経験でわかっていた。

実は目の前にいる子どもたちの大半は、私の母校、今は「伊達市立」となった、旧梁川町立やながわ梁川小学校の、うんと年の離れた後輩たちだった。お世話になる大人たちに、はにかみながら自己紹介する一人ひとりの背をはらはらしながら、親になったかのように見守っていた。

そんななか、何人かの子どもが強い意志を口にした。

「川で、遊びたいです」

ああ……。瞬間、身体が硬直した。

遠い昔、小学生だった頃。夏休みといえ、川だった。学校のプール以外は、川しかないといつていいほどに。

通常の遊び場は自宅裏にある天神さまだが、夏場はその裏にある塩野川が主役となった。泳げるような流れではなく、足首までのチョロチョロした瀬と、大きな石が点在する膝下までの淵。それが、その世界のすべてだ。朝から暗くなるまで、透き通った流れに浸かって毎日、飽きることはなかった。カイパリ（服を水で濡らす）しても、家に戻る時間がもったいなくて、カイパリのパンツはじきに乾くと言い聞かせた。

時に年長の男の子たちは、小学生とは次元の違う遊びをやった。大きな石に身体ごと覆いかぶさり、石の底に両手を回す。ぱっと起き上がるや、その手には腹が虹色に輝く銀色の魚がのけぞって跳ねる。キラキラ輝く魚を勳章のように掲げ、誇らし気にチビたちに笑って話すのだ。

「ほれ、石の下で、寝てんだー」

手品のような技が眩しくて見よう見まねをするけれど、一度も魚に触ることもできなかつたし、たとえ触ったとしても、きやつと手を引っ込めてしまうことも自分ではわかっていた。

夢中になったのは川砂の中にある、黒みどり色の貝だ。しじみだった。ある日、群生する場所を発見した。両手いっぱいを持ち帰れば、台所に立つ父が目を輝かせ、味噌汁に。毎日飽きもせずせっせと貝を持ち帰り、やがていくら探してもただの1個も見つからない日がやってき

た。だから、塩野川のしじみを絶滅させたのは私だと思っている。

それが小学生にとっての、当たり前前の日常だった。川だけでない。弟と「春」を探しに出かけた田んぼや畑の畦道も、登って腰をかけうつとりするのにちようどいいくるみの枝も、ダンボールで滑り降りる堤防の土手も、「バッタラ」（草を縛って足をひっかけて転ばす罟）を仕掛けた草原も、大木の根っこで囲われた崖の中腹にある秘密基地も、あの時、子どもだった私は自然の中に身体を投げ出し、もたれて、くるまれて生きていた。

だけど、目の前の子どもたちの日常に、同じ世界はもはやない。目には見えるけれど、山も川も田んぼも変わらずにあるのだけれど、跡形もなく消えてしまった。川遊びどころか、すべてだ。草を摘むことも、虫と戯れることも、山の鎮守への冒険も、山の恵みを食すことも……。だから、この子たちはバスに乗ってこんなに遠くまでやってきた。「川で遊ぶ」ために。子ども時代に空気のように当たり前だったことを、私はこの子たちに残してあげることができなかつた。子ども時代のすべてとっていい世界を、同じ土地で生きる小さき者たちに、残すことができなかつた――。

夜の帳とぼりに包まれた教会のホールの片隅で、私はまざまざと知った。その取り返しとぼりのつかなさ、悔しさを、どうしようもないほどの悲しさを。なぜ、そんな事態を許したのか。はつきりと思った。私だって紛れもない、この子たちへの加害者なのだ。

本書は私の故郷である福島県伊達市を舞台に描かれる。

伊達市は福島県中通りの北端に位置し、南部を飯舘村いいたてむら、川俣町かわまたまち、南西部を福島市、北部を宮

城しろ白しろ石いし市、丸まる森もり町、東部を福島県相馬市、西部を桑折こおり町、国見町と接する。人口は約6万2000。

実は「伊達市」という呼称に、私はまだ違和感がある。伊達市は2006年1月に伊達町、保原町ほばら、梁川町りやうせん、靈山町つきたて、月館町という、伊達郡内の5町が合併してできた、新しい自治体だからだ。

ゆえに出身の梁川町ならともかく、「伊達市」と括られるエリアには馴染みではない土地もある。出生地であり3歳まで住んだ国見町の方が、母の実家があったこともあり、土地勘があるかもしれない。

伊達市は南北に長い市域で、周囲を山に囲まれた盆地にあたる平野部と、南部には山間地が広がる。阿武隈川あぶくまが流れる平野部に位置する梁川町、保原町、伊達町に人口が集中し、この一帯が商工業の中心だ。東北本線、阿武隈急行など鉄道交通網もこの地域に限られる。一方、阿武隈高地の山間部に位置する靈山町や月館町は人口密度も低く、農業や林業が産業の中心となっている。風光明媚でのどかな風景が広がるが、過疎化が進んでいるのも現状だ。

「伊達市」という名は、奥州伊達氏に由来する。伊達氏発祥の地であり、鎌倉時代には伊達氏の本城、梁川城が梁川町に築かれ、伊達政宗が初陣祈願をしたという梁川八幡神社（八幡さま）は、幼い私にはちよつと勇気を出して足を伸ばす冒険の場所だった。

一方、南北朝時代には南朝側の北畠あきいん顕家のりよしが義良親王（のちの後村上天皇）と靈山町に靈山城を構えて、北朝への拠点にするなど、中央の歴史にも顔を出す。

主な産業は農業だが、養蚕が盛んな土地だったという歴史がある。江戸時代には伊達郡一帯

で養蚕が発展し、梁川は全国に知られる「蚕都」だった。

養蚕が斜陽産業となるや、桑畑は桃やりんごなどの果樹畑へ、製糸業者はメリヤス業へと転身した。今も阿武隈急行保原駅のキャッチコピーは、「ファッショニットの町」だ。中卒で働きはじめた同級生たちは大抵、メリヤス会社に就職した。しかし今、メリヤス産業に往時の勢いはない。

伊達市を取り上げるのは故郷であるという個人的な理由だけではなく、原発事故のさまざま
な問題の「縮図」が、ここ伊達市にあると思うからだ。

「特定避難勧奨地点^{ひなんかんしょう}」という言葉を、覚えている人はどれだけいるだろう。「地点」とは世帯、家のこと。家ごとに「特定」に「避難」を「勧奨」するという制度が作られ、現実に施行された自治体のひとつである。伊達市の南部、飯舘村や川俣町に接するエリアに、追加被曝線量が年間20ミリシーベルトを超える「地点」があると判断され、未だかつてなかった制度が適用された。

隣の家は「特定」の「家Ⅱ地点」と判断され、「避難」が「勧奨」されたにもかかわらず、自分の家は避難しなくていいという結論が行政から下される。同じ集落、同じ小学校、同じ中学校に、避難していい家と避難しなくていい家が存在する。「勧奨」だから、避難はしてもしなくてもいい。年寄りが今まで通り自宅で農作業をしながら暮らしても、東電から毎月慰謝料が支払われる。一方、「地点」にならなかつたら、子どもが何の保障もなくこの土地に括り付けられる。

伊達市に設定された特定避難勧奨地点は2011年6月30日から、2012年12月14日の「解除」通告まで、実質1年半という期間のものだ。だが、その1年半の間に、地域社会をズタズタに切り裂いたこの制度を過去のものとして終わらせていいとは、私には思えない。

伊達市は、「除染」という問題を考えるにも、重要な自治体だ。2011年夏、伊達市は「除染先進都市」として華々しいデビューをした。同年5月、伊達市長は衆議院文部科学委員会に参考人として呼ばれ、「表土除去＝除染」の効果について証言を求められた。さらに14年2月にはオーストリア・ウィーンにある国際原子力機関（IAEA）本部に招かれ、伊達市の取り組みを報告、同市の除染担当職員も各地で講演を行い、一部から「除染の神様」と呼ばれるまでとなった。

この「除染先進都市」は、市内を汚染の度合いによってA、B、Cの三つのエリアに区分、エリアごとに異なる除染を行うという、他の市町村にはないオリジナルな「考え」にもとづいた除染方法をとった自治体でもある。ここには現・原子力規制委員会委員長、田中俊一の強い影響力が働いている。田中は事故後いち早く、伊達市の放射能アドバイザーに就任、除染を主導した。

近隣に先駆けて除染に取り組んだ伊達市だが、未だ市内の7割を占める地域では全面的な除染が行われていない。それが、汚染が低いとされるCエリアだ。伊達市は「必要がない」という理由で「全面除染」を行わずに、線量が高い部分だけを除去する「ホットスポット除染」に徹している。

伊達市より「遅れて」ではあっても近隣自治体は、居住地への全戸全面除染を行っているというのに、住民の生活圏である宅地を放射性物質が降り注いだ「そのままに」しているのは例を見ないと言えるだろう。

それどころか、この「除染先進都市」は今、除染に過度の期待を抱かせたことを「反省」する。田中の後任のアドバイザーは「無駄な除染は全国の納税者、電気料金負担者に申し訳ない」と公言している。私はギリギリ納税者のひとりとして、そんなことは微塵も思わない。限りなく、被曝の危険性を取り除いて欲しいと願うだけだ。住民は被害者であり、ばら撒かれた放射性物質を受け入れろと言われる所以は全くないし、あってはならない。

また伊達市は、全世界で初めてとなる壮大な実験を行った自治体でもある。個人線量計（ガラスバッジ）を約5万3000人も全市民に1年間装着させ、実測値を得たのだ。この貴重なデータは今後、原子力国際機関はじめいろいろところで活用されていくだろう。おそらく、被曝管理基準を緩和するためのものとして。

伊達市に注目していくことは、ひとたび原発事故が起きれば私たち一般市民がどのような事態を甘受させられるのか、何が起きるのか、その具体例を疑似体験していただくことに他ならない。それは決して、他人事ではないのだと思うのだ。

本書につながる取材を開始したのは、2011年8月だった。中学の同級生のつてを辿^{たど}って、伊達市で子どもを育てている女性たちに話を聞いて歩いた。それは恥ずかしながら私自

身、故郷と向き合った初めての経験となった。私はこの土地で「子ども」として生き、育んでもらえたが、大学進学のために18歳で故郷を出て以来、「大人」として地域のために何か関わった経験はない。もちろん、何度も帰省はしている。でも、それはただの「お客さん」だ。

こんな自分が故郷を書くことなどできるのだろうか。あまりにおこがましく、何度自問自答し、逡巡したことだろう。私自身、「郷土愛」に溢あふれている人間では決してない。それでも書かなければいけないと思ったのは、紛れもなく私はあの土地のあの言葉で育ったのであり、あの風土が身体を形作ってくれたと思うからだ。

原発事故以来、なぜかわからないが身体が軋こみ、胸が締めつけられ、涙が流れている時がある。なぜ、そんな感情が押し寄せてくるのかはわからない。だけでもしかしたらそこに、私が「書く理由」があるのかもしれない。

かつてこの土地も全国の他の地域と変わることなく、過疎化は進行していたものの、澄んだ空のもと、人はごく普通に生きていた。お天道様の陽を浴びて大きく息を吸い込んで。

しかし放射性物質が降り注いだ以上、「以前」と同じ生活はあり得ない。いくら除染をしても、元の土地に戻らないことは誰もが知っている。ならば放射能から目をそらし、「折り合い」をつけることでしか、ここでは生きていけないのだろうか。

原発事故からもうすぐ6年、今、放射能を気にすること自体が後ろめたいことになっていく。専門家たちが、被曝より生活習慣病の危険を指摘する今、もはや世は放射能汚染、被曝の危険性を「ない」ものにしたいのだろう。東京オリンピックピックのために。

このような風潮に押しつぶされそうになる「今」だからこそ、私は被曝の危険から目をそらさず、事実と向き合い、身を挺して子どもの前に立ち続ける親たちの姿を見つめたい。放射能を受け入れるという「折り合い」がつけられない親たちの姿を。

とりわけ伊達市は早くから、市長自ら「心の除染」を謳^{うた}ってきた。実際に放射性物質を取り除くことより、放射能汚染や被曝を心配する心や気持ち——そんな「根拠のない」感情をこそ、除染すべきであると。

ゆえに本書のタイトルは、この伊達市長の名言からいただいた。

子どもを守るといふ、たった一点の曇りなき思いに支えられた営み、その思いすらを「除染」しようとする伊達市で、親たちはこの6年、どのような歩みを続けてきたのか、そして今後をどう思うのか——。それを本書で伝えるのが、私の使命だ。

強く思う。自分もまた親であり、守るべきものを持つ大人として、私はその人たちのそばに立ちたい。この地で育んでもらえた、ひとりの人間の責任として。

何より、原発を放置してきた大人として、幼きものへの「加害者」であることを自覚した今こそ。

「心の除染」という虚構

除染先進都市はなぜ除染をやめたのか

目次

はじめに 3

序章 19

第1部 分断 — 67

1 見えない恐怖 69

2 子どもを逃がさない 77

3 特定避難勧奨地点 86

4 届かぬ思い 100

5 分断 112

6 除染先進都市へ 127

7 「被曝」しています 138

8 「避難しない」という決断 156

9 訣別 164

第2部 不信 — 181

1 「蜂の巣状」 188

2 小国からの反撃 201

3 公務員ですから 210

4 解除 230

第3部 心の除染—— 243

1 家族を守るために 245

2 放射能に負けない宣言 250

3 除染交付金の動き 255

4 少数派 258

5 除染縮小の方向へ 267

6 「どこでもドア」があれば 275

7 選挙前の「変心」 280

8 手にした勝利 287

9 市長、ウィーンへ行く 293

10 交付金の奇妙な変更 296

11 新しい一歩 311

12 Cエリアに住むということ 324

13 「放射線防護」のための除染 333

あとがき

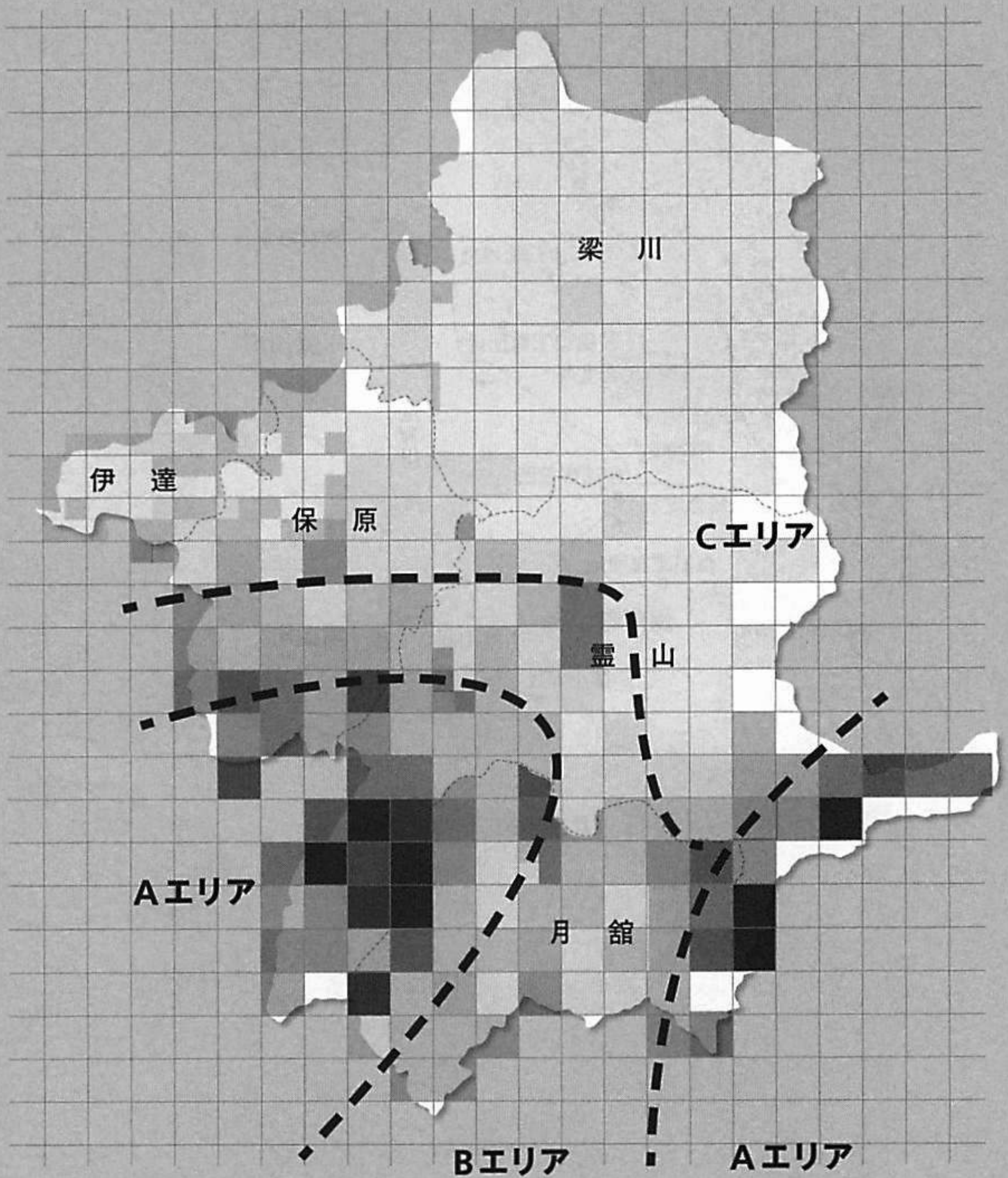
352

福島県



伊達市一斉放射線量測定マップより

(平成24年3月23日～25日実施)



序章

2011年3月11日。すべては、この日から始まった。

この日、伊達市の空は気持ちよく晴れわたっていたという。冬場は、どんよりと陰鬱な雲が立ち込めるこの地。青空が少し垣間見られただけで、春の鼓動を感じて心が浮き立った日を思い出す。

春の訪れをそろそろ期待していいかもしれない、そんな季節を迎えていた。

午後2時46分、震度6弱という激震が伊達市を襲った。

(1)

伊達市のなかでも霊山町は阿武隈山系に位置する山あいの町だが、中心地からさらに南西へ下る山に囲まれた土地に、「小国^{おぐに}」という集落がある。

福島市と川俣町に接するこの小さな山里はのちに、「特定避難勧奨地点」が設定され、全国的に注目されることになるのだが、普段は人里離れた静かな土地だ。

周囲を標高200～300メートルの山々に囲まれ、川沿いのわずかな低地に田畑が開かれ、農業や林業を主な生計手段として人々は暮らしてきた。

集落の歴史は古く、伊達政宗に仕えた地侍を先祖にもつという、26代以上続く農家もある。かつて養蚕で栄えた時期もあったが、今は過疎化が進むばかりだ。

村の成り立ちを見ると、明治の町村制施行時に下小国村、上小国村、大波村の三つが合併して「小国村」となり、戦後は昭和30年に誕生した霊山町に編入され、小国村は廃村となった。

この時、大波村だけは隣の福島市に編入され、小国と袂を別つ。

郷土の誇りは、第1回帝国議会に福島1区から選出された、佐藤忠望（1852～1904）だ。この先覚者の最大の功績は、明治31年、小国に「上小国信用組合」という、日本最初の農業協同組合を設立したことにある。それほど小国が貧しかった現れでもあるが、佐藤は協同金融事業を興すことで、零細農家の窮乏を救おうとした。

上小国にある公民館「小国ふれあいセンター」には農協発祥地の記念碑が立ち、県道51号を走れば、「農業協同組合発祥の地」という看板が目に飛び込んでくる。

地区の人口は、「上小国」と「下小国」の両方を合わせても1300ほど。

中心部は、小学校や商店もある下小国地区で、ここには福島と相馬を結ぶ幹線道路、国道115号線も通っている。

小国唯一の小学校「小国小学校」は、全校生徒が50人ほど。かつては上小国にも小学校があったが統合されて久しく、子どもの数は減る一方だ。

早瀬道子^{はやせみちこ}（仮名、当時39歳）は、この下小国で暮らしていた。

「早瀬家」は夫の和彦（仮名、当時41歳）と夫の母、子ども3人の6人家族だ。

先祖代々、小国の住民なのではなく、この土地を選んで移り住んできた「新住民」だ。霊山町中心部に住んでいた夫妻は、自然の中で子どもを育てたいという強い思いがあり、2人目の子どもの誕生を前に、田舎暮らしを実現しようと下小国に中古の家を買って、夫の母を呼び寄せ、3世代の暮らしが始まった。周囲には牧草地や沼もあり、夫妻が望んだ理想的な環境だった。

小国の地で子どもが2人生まれ、犬や猫も家族となり、夕方には家族みんなで犬を連れて散歩をするのが日課で、その折々に採った山菜やキノコが食卓にのぼるといふ、「理想の暮らし」が始まって4年を迎えたところだった。

この日、道子は6時半に起きた。

「金曜日は、玲奈と駿の弁当がある日だから」

幼稚園年少の長女・玲奈^{れいな}（仮名、当時5歳）と、「未満児クラス」の次男・駿^{しゅん}（仮名、当時4歳）の弁当を作り、朝食の用意をして、子どもたちを起こす。朝食を食べさせ、歯磨きと着替えをさせて幼稚園バスに乗せるといふ、いつも通りの慌ただしい朝を迎えていた。

自営で建設業を営む夫・和彦は朝食もそこそこに現場へと向かう。幼稚園バスが迎えにくるのは、7時40分。小国小学校1年の長男・龍哉^{りゅうや}（仮名、当時7歳）は、それより20分前には家を出る。畑や田んぼの畦道を通って、学校まで歩くこと20分から30分。

子どもを送り出すと、道子はいつも通り8時前には家を出た。保育士である道子の職場は、

伊達市保原町郊外にある山あいの幼稚園で、小学校の敷地内にあった。

「この日は午前中は修了式の練習をして、午後は年長児のお母さんたちが、私たちに謝恩会を開いてくれる日だった」

年度末らしい行事が、ちよこちよこ入ってくる時期だった。

「謝恩会が終わったのが1時半、みんなが帰って落ち着いたのが2時過ぎ。2時半から職員会議が始まって、コーヒを飲みながら、話し合っていた時でした」

突然、突き上げるような縦揺れを感じたと思ったら、あつという間にぐらんぐらんと建物が揺れ出した。机の上に置いたコーヒカップが四方八方に飛び散り、壁や床にあたってびしゃーん、びしゃーんとすさまじい音を立てて割れる。

「先生たちはみんな一斉に、職員室の外に出た。子どもは預かり保育の子たちだけで、ちよこどお昼寝中でした。床暖が効いているのでパンツとシャツで寝かせていて、その子たちを毛布で包んで抱っこして外に出た。園庭の真ん中にみんなが集まって、手をつないで……。つないでいる先生たちの手が震えていた」

隣の小学校のプールでは、ばしゃーん、ばしゃーんと水がうねり、巨大な怪物が泳いでいるような音を立てる。

晴れていたはずなのに、みぞれが降ってきた。地鳴りなのか山鳴りなのか、大地が不気味な音を立て、みぞれはやがて大粒のおびただしいぼたん雪となり、横殴りに荒れ狂い、容赦なく頬を打つ。

大人に抱っこされた子どもが泣き続ける。

「先生、こわいよー、こわいよー」

携帯の地震速報が鳴るたびに、恐怖が走る。こちらが不安になれば、余計に子どもが不安になる。わかっているけれど、大人にとってもこんな天変地異は初めてだ。

道子は精一杯、園児に声をかけた。

「大丈夫だよ、大丈夫だから」

自分自身にもそう言い聞かせていた。

「抱っこしている子どもに『大丈夫だから』って言いながら、先生たちの握る手の強さがものすごくかった。そうやって、『生きてるね』って確認するっていうか……」

園児の母たちから、園に電話が入る。そっちへ向かっているけれど、道路が割れて迎えに行けない、信号が落っこちてどうしようもない……。

「子どもを抱っこしながら、私、すごく複雑だった。この子たちを守らなきゃいけない義務があるのに、自分の子どものことを考えていた。大丈夫かって。あとから思うと、だから私、真の保育者ではないんです」

居ても立ってもいられず、家にいる義母に電話をした。

「子どもら、大丈夫？」

「大丈夫だ。さっき幼稚園のバスがきて、玲奈と駿は今、家の外にいつから。龍哉くんも帰ってきたがら」

この日、小学校の下校時刻は2時半だった。地震発生と同時に教師たちは下校中の子どものところへ走って追いつき、道路に手をついて座るように指示をした。その後、一人ひとりを家

まで送り届けたという。全校生徒50人あまりの、小さな小学校だから可能だった。そうやって龍哉は無事に帰宅した。

道子は胸をなでおろし、園児たちのお迎えを待った。近所に住んでいる祖父母が歩いて迎えにきた。これでようやく、肩の荷が降りた。

道子が帰宅したのは、3時半。子どもたち3人がわんわん泣きながら、しがみついてきた。この日はずっと揺れ続けた。揺れるたびに子どもは泣き喚わめいた。

割れて飛び散ったガラスを掃除し散乱する物を片付け、とにかく、寝る場所だけは確保し家族全員こたつがある部屋で寝ることに決めた。着の身着のまままで、いつ何があっても大丈夫なように車を玄関に付けて、車の中に全員の靴を入れた。

道子は明るく、子どもたちに言った。

「こういう時はどうなっかわがんねがら、とにかく食べっぺ。そしてそのまま寝るよ」水道が止まったのは翌朝だったため、この時点で水に困ることはなく、いつものようにご飯を炊いておにぎりやにぎった。泣き疲れた子どもたちは眠りに就いた。

子どもが寝たことでほっとしたもの、自分はどうしても眠れない。大地は一晩中、揺れ続けた。酒好きの夫がこの日、一滴も飲まなかったことを道子は覚えている。

霊山町は電気が止まることはなく、テレビで情報を得ることはできた。道子はずっと津波の映像を眺めていた。一体、何が起きているのか、まだ現実のことだとは思えないままに……。翌日は土曜日で、仕事は休みだ。

「これからどうなるかわからないから、朝9時にガソリンを入れに行こうとなつて、お父さん

と子どもたちと車でスタンドに行つて、何台か並んでいたけど、この日は入れられた。これがよかつたの。その足で誰も住んでいない梁川の実家の様子を見に行つて、こつちも物が散乱してものすごいことになっていた」

道子は、私と同じ伊達市梁川町の生まれだ。ただし保原町と隣接する堰本地域せきもとちという、梁川でも南部のエリアで、梁川中心部で育つた私と小学校は違うが、中学は同じ梁川中学校に通つた。道子の実母は兄が住む横浜に身を寄せ、実家は無人になっていた。

12日、午後3時36分、福島第一原発1号機が水素爆発。

この爆発をリアルタイムで、道子はテレビのニュースで知つた。瞬間、ふっと亡父の言葉が蘇つた。幼い道子に、父はずつと言つていた。

「福島県は原発がある県だから、もし原発が爆発したら、車に乗つてみんなで遠くに逃げるぞ。逃げないとダメだからな」

テレビで言っているニュースは、父が言つていた「逃げる」という事態に当たるのか、道子には何が何だかわからない。ニュース画面を見つめながら、道子は夫に言い続けた。

「逃げなくていいの？ 逃げなくて大丈夫なの？」

午後6時25分、半径20キロ圏内に避難指示。

「10キロの避難の時はまだ大丈夫かなつて思ったけど、20キロになった時、あたしはもう、だめだつて思った。だつて、空気を渡つてやってくるんだから」

翌13日は、「ただ、家にいた」。テレビは原発のニュースばかり。

「『直ちに影響がない』つて、そればかり。私、頭にきて、その日の夜、テレビ局にFAX

したの。『直ちに影響がないって、後から影響があるんじゃないですか』って」
14日は月曜日だが、龍哉を学校に行かせるつもりはなかった。まもなく、地震の影響で学校も幼稚園も休みになった。

午前11時1分、3号機が爆発。

15日、午前6時14分、4号機爆発。2号機で衝撃音。11時、半径20キロから30キロ圏内の住民に屋内退避指示。

放射性物質が飯館村や伊達方面へと流れてきたのは、この爆発だった。

「子どもは絶対に外に出さなかった。窓やサッシはほとんど開けなくて、玄関を開けるのは井戸水をくむ時だけ。お風呂は無理でも、煮炊きするぐらいは、井戸水でなんとかあったから」
初めて子どもを外に出したのは17日。ドラッグストアでの食料の買い出しと、入浴施設へ行くことにしたからだ。水道が止まってお風呂に入れないため「バケツ風呂」で対応してきたが、さすがに子どもには限界だった。だけど……と道子は唇を噛む。

「買い物では車から出さなかったけど、お風呂。霊山町の紅彩館こうさいかんという、今、考えれば、一番放射能の高いところにわざわざ連れてったんだよね」

紅彩館は「霊山こどもの村」の一角にある入浴施設だ。ここ霊山町石田地区はのちに「特定避難勧奨地点」に指定されるほど、線量が高い場所だった。

しばらく後になって道子は、「霊山こどもの村」で働いていた知り合いからこんな話を聞いた。

「たまたま線量計があって測ったら、30、40と上がって1000（マイクロシーベルト／時）近

くまでなっただって。15日の夕方から特に高くなっただって。どんどん上がるから伊達市に報告したけれど、何も動きがなかった」

15日の夕方は、福島第一原発から北西方向に放射性物質が風に乗って運ばれた時だ。その放射性プルームは飯舘村上空の雨雲で降下、沈着した。飯舘村に隣接する伊達市霊山町や月舘町一帯にも、この時に放射性物質が降り注いだ。

この時期、後に飯舘村同様、計画的避難区域とされた川俣町山木屋地区やまきやでも3桁の数値が観測されたという「噂」がある。霊山町石田地区でも3桁という数値が検出されたという話もあった。もちろん、正式な記録として残っているわけではない。

道子は言う。

「その頃はそんなこと、わかんないから。とにかく、子どもを風呂に入れようと連れて行った。飯坂温泉に電話をしたら、浜通りからの避難者でいっぱいだし、入れるお風呂はそこしかなかったから。テレビで言っていたから、子どもにはつるつるのジャンパーを着せて、マスクをさせて、車をお風呂の玄関に横付けして、『降りろー、走れー』って」

この時期は、ガソリン不足が深刻化していた。列に並び、練炭で亡くなる人も続出したことを道子は記憶する。

「知り合いからタンクローリーが来るかもしれないって情報が入って並んだけど、ものすごい行列で全然進まなくて、結局、ガソリンを減らすよりいいかって帰ってきた」

23日、横浜に住む兄から連絡が入った。

「海外のスピーディー（SPEDDI）をネットで見たら、そっちに飛んでいる。すぐに逃げ

ろ」

夫は新潟出張のため、しばらく家にいない。

「別の親戚からも、逃げろって連絡が入った。栃木まで迎えに行くからと。でも高速も止まっ
ていて、ガソリンも十分にあるわけでもなく、そんな状態で飛び出してガス欠になったらどう
すんの？ 子どもがいるのに。お父さんが新潟でガソリンを買って来ると言っていたから、そ
れまでは辛抱しようよ……」

夫が新潟から戻った翌日の31日、一家は横浜へ向かった。夫は妻子を送り届けて小国に戻っ
たが、道子たちはしばらく横浜で過ごすことにした。子どもたちが外で遊ぶ姿を見たのは、久
しぶりのことだった。

放射能の心配のないところで、しばらくのびのび過ごさせたい。しかし、この願いは叶わな
かった。まさか、この状態で通常通りに新年度が始まるとは思えない。しかし伊達市教育委員
会に問い合わせたところ、担当者は事もなげに言った。

「もう、大丈夫ですから。何でもありませんから、入学式も入園式も普通に行います」

4月3日、迎えに来た夫の車で一家は小国に戻った。入園式で道子は司会役をすることが決
まっており、幼稚園を休むわけにはいかなかった。

「帰りの道中、福島県に入ったのに、子どもたちは横浜のノリで、地べたに寝そべったり座っ
たりごろごろするの。それがすごく嫌で、『やめて、やめて』って私、何度も言ってる……」

道子が出勤した4日と5日、子どもたちは義母の目を盗んで外で遊んだ。「横浜のノリ」そ
のままに。

玲奈が鼻血を出したのは、翌朝のことだ。これまで鼻血など出したことがない子なのに、それも布団を真っ赤に染めるほどのおびただしい量だった。

「だんなは、『鼻、引っ掻いたんだべ』って軽く言うんだけど、私には到底そうは思えなかった。引っ掻いたぐらいじゃ出ない、とんでもない量だったから」

4月5日、幼稚園は予定通り、入園式を行った。その時、同僚の教諭と抱き合って道子は泣いた。入園式に集う園児たちの姿が不憫でならない。

「こんなに大変なことが起きてんの……この子たち、絶対に、ここに来てる場合じゃないのに。あんたたち、ここに来てていいのー？ でも、来るしかないんだよねー」

無邪気な園児の笑顔が胸をかきむしる。本当にこのまま、「何事もなかった」ような日々を過ごしていいのだろうか。園児たちのあどけなさに嗚咽が漏れた。

そうであっても道子はまさか、今、この時にわが家やその周囲が、住んではいけないほどの放射線量を記録しているとは思いつかなかった。

(2)

2011年3月11日、この日の午前中、伊達市内の中学校では卒業式が行われた。

霊山町上小国に住む高橋佐枝子（仮名、当時51歳）は、霊山中学校で行われた長女・彩（仮名、当時15歳）の卒業式に出席した。

上小国は、道子が住む下小国より南方に位置する山あいの地域だ。山裾すそにぽつんぽつんと点

在する大きな屋敷が目を引くが、天井が高いこれらの家々は、かつての養蚕農家だという。養蚕で栄えた歴史をもつこの地域は、山あいの狭い土地に張り付くように田んぼや畑が開かれ、小規模な酪農農家も数件ある。

ほとんどの住民が一戸建てに住み、174世帯（平成22年調査）のうち、持ち家に172世帯、借家に2世帯が住む。下小国では長屋やアパートなどの共同住宅に5世帯が住むが（239世帯のうち）、上小国では共同住宅は皆無。先祖代々受け継がれている家と土地で、日々の暮らしが営まれている証だった。

この日、卒業式を終えた彩は友人たちと福島市内へ打ち上げをするためにバスで出かけて行った。小国から福島駅周辺まではバスで約20分、伊達市中心部の保原へ行くのと変わらないとなれば、福島の方が魅力的だ。

梁川出身者の私にすれば、バスしか交通網がなかった頃には、福島市内は片道1時間は覚悟する遠方の地。中学生の打ち上げで行ける場所では到底なかった。霊山や小国は阿武隈山地へ吸い込まれていく「辺境」というイメージがあるが、その背後に福島市があり、福島への便がよいというのが、小国という土地を知った時の驚きだった。

佐枝子が地震に遭遇したのは、老人ホームに義母の洗濯物を取りに行った時のことだった。普段は家で佐枝子が介護をしているが、この日は卒業式に出るため、老人ホームを短期ステイで利用していた。

義母の部屋に着いた時、どーんと下から突き上げるような激しい揺れが起きた。

「ものすごい縦揺れの後に、今度は横揺れが来て、ガタガタととんでもなく揺れて……。長か

ったね。慌てて、ばあちゃんを連れて外に出たの」

義母の手を握って施設の外に出た後、高校の春休みで家にいる長男の直樹（仮名、当時17歳）に電話をした。直樹は母屋に住む義父の無事を確認してくれていた。家も大丈夫だと言
う。

その頃、ホームでは入居者たちが次々と外に出され、広場に集められた。毛布をかぶっている老人たちが「寒い」と口々にうめく。気がつけば、雪が激しく降っていた。

次男の優斗（仮名、当時12歳）は小学6年生、まだ小国小にいる時間だ。ならば、優斗は安全だ。佐枝子にとって心配なのは、福島市内にいる彩だった。何度かけても携帯が繋がらない。ようやくつながった電話の向こうで、彩は怯えていた。

「陸橋を渡ってる時に、ちょうど地震に遭ったの。ものすごく揺れて、すごく怖かった。今、友だちと一緒に駅にいる」

「わがった。迎えに行くがら」

その1回の通話だけで、二度と携帯はつながらない。車を発進させてすぐ、佐枝子はとんでもない事態になっていることを知る。

「福島駅まで、行げんだべが……」

信号は全部消えている。なのに、大きな交差点でも誘導する警官は1人もいない。電信柱が倒れて、ブロック塀は崩れ、走っている最中に何度も余震が来る。

「まだ、明るかったからいいけど、真っ暗だったら、福島まで行けたかどうか……」
必死で目を凝らし、ハンドルを握った。後になって思うのは、この時にガソリンを入れてお

けばよかったということだ。

ごったがえす福島駅西口で彩と友人を見つけ、友人を家まで送り届け、無事に自宅に戻った。

優斗は友だちの母親が、車で送ってきてくれた。国見町に勤務している夫・徹郎てつろう（仮名、当時51歳）は、阿武隈川にかかる橋がことごとく通行止めとなり、梁川橋だけが通れることがわかって、崩れた道路を回避しながら、ようやく帰宅。家族全員が無事に揃った。

小国はライフラインに問題はなかった。電気とガスに異常はなく、昔ながら井戸水での生活が営まれているので、水についても一向に問題はなかった。

佐枝子は、私の梁川中学校の同級生だ。在学当時は面識がなく、幼なじみであり同級生の河野直子（仮名、当時51歳）から原発事故取材のために紹介してもらった仲だ。

正直、中学の同級生が水道も通っていない山奥で暮らしていることが驚きだった。そもそも梁川で暮らしていた子ども時代から、水道がない生活などあり得ない。しかも佐枝子は嫁として義父母の介護をしながら、3人の子育てをしている。自分とかけ離れた「その後」の人生を見て、私には到底、真似できないとつくづく思う。もったも、伊達市内で暮らす幼なじみの直子であつても、「私も、あんな山奥で暮らすのは、絶対に無理だよ」ときっぱりと言う。確かに、それほどの実感を抱く場所だった。日中はまだしも、とつぷり日が暮れたこの地を想像しただけで、尻込みするような思いにかられる。

高橋家は田んぼと畑をもつ兼業農家なので、米は十分にあった。ライフラインに何ら支障はないわけだから、あの日、夜は普通にごはんを食べたはずだと佐枝子は言う。しかしこの日の

記憶が定かではない。

テレビはずっとつけっぱなしにしておいた。しかし、佐枝子の記憶に津波の映像は一つも入っていない。この日に何が起きたのか、佐枝子は何もわかっていなかった。

「覚えているのは、テレビに変な絵だけ、同じのが繰り返して流れていたこと。にこにこにつきり、ぽこぽこぽーんばかり。震源地がどこかもわかんない。なんだか、何も覚えていない。地震が止まんないし、パニックだったのかも」

着の身着のまま、この日は寝た。

「夜中でもずっと揺れ続けるものだから、まだ揺れでんの？　今は止まってんの？　ってわけがわかんね。気持ち悪くなるぐらい」

福島第一原発1号機が爆発したのは、翌12日。もちろん佐枝子も徹郎も、テレビのニュースでそれは見ている。だが所詮、自分たちとは関係のない、遠く離れた場所での出来事だった。

「爆発したのは知ってたけど、遠いからね。山越えて、こっちまで来ないよねって感じ」
徹郎も同じだった。

「テレビで、『大丈夫、大丈夫』って言っているし、放射能が降ってるなんて思いもしないから、俺は地震の次の日から毎日、野郎子やろうこ（長男）連れて、自転車で買い出し。ガソリンがねえがら、車使わんにくて。食料品は、2日目から何も無いから。肉とかそういうの。ここらは店、ずっとないから」

3月15日朝、4号機が爆発。この日、第一原発付近の風向きは北西方向。この風に運ばれて、「まさか、いくつも山を越えてまで来ないべ」と、佐枝子が思っていた小国にまで、放射

性物質はやってきた。

高橋家と同じ集落に住む市会議員、菅野喜明（かんの よしあき）（当時34歳）には、忘れられない光景がある。「3月16日は議会最終日だった。その日、朝10時の議会に出るために外に出たら、太陽が霞みがかっている感じで、空気がキラッキラ光っている。まるで、ダイヤモンドダストのような。空気が黄金色にキラキラ光っていて、これはなんじゃって。市役所のある保原にいくと、そんなにひどくない。空気が光っているって嫌ですね、あれはなんだろうと……。家のなかにいるのに息苦しくて、呼吸ができないんです」

この日、空気が光っていたという複数の証言もあるが、佐枝子にその記憶はない。むしろ大変だったのは、食料調達だったと振り返る。

「それでも、テレビで言ってることはやってたの。マスクつけてジャンパーを着て、着た服は家の中に入れないようにして、外で脱いで袋に入れて外に置いておく。窓は開けないで、換気扇は回さない」

しかし後に佐枝子は、この日のことを身が引きちぎられるほどに悔いるのだ。

「15日は夕方から雪になったの。16日の朝、私が雪掃きゆきはしていたら、優斗が『オレ、手伝ってやっから』って外に出てきたの。マスクもしてないし、帽子もかぶってないのに、私、優斗に雪掃きさせだんだよ。ここらが放射能が高いなんて、全然、知らないから」

16日、県立高校の合格発表が行われた。

「高校に問い合わせたら、できれば来てもらいたいって。だから彩を車に乗せて一緒に行っ

て、入学の書類をもらって、結果を中学校に報告して帰ってきた」

彩が入学する福島市内の高校も、そして霊山中学校周辺も放射線量は決して低くはない。しかも、放射性ヨウ素が盛んに飛んでいた時期だった。

やがて、小国は線量が高いという噂がちらほら聞こえてくるようになった。高橋家のすぐ近く、旧上小国小学校跡地につくられた小国地区の公民館「小国ふれあいセンター」が高いという声が耳に入ってくるけれど、正確な数字は誰も知らない。

たまたま、同じ上小国に嫁いでいる佐枝子の姉が「小国ふれあいセンター」で働いていた。姉は爆発後のかなり早い時期から、白い防護服を着た男たちがふれあいセンターに来ているのを目撃していた。線量を測っているとわかったので、声をかけた。

「ここは、なんぼ、出てるんですか？」

いくら聞いても、数字は教えてもらえない。その人たちは毎日来た。機械の数字だけでもこっそり見ようとしたが遮られ、代わりにこうささやかれた。

「もし、行くところがあるのなら、避難したほうがいいですよ」

23日、伊達市は小学校の卒業式を通常通りに行った。

伊達市が発行した『東日本大震災・原発事故 伊達市 3年の記録』で、伊達市は「見えな
い敵 放射能との闘い」の章を、3月23日から始めている。放射能対策の起点であり、この日
からすべてが始まったというのが伊達市の理解だ。

記録は、この記述から始まる。

「国はSPEDDI（緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム）により、3月12日午前6時から24日午前0時までの被ばく試算線量を初めて公表し、福島第一原発より北西方向に放射能汚染が拡大しているとした」

スピーディーの公表により、伊達市は初めて、放射能汚染と無縁ではない、むしろ汚染されているという事実を公的に知った。

なのにこの日、伊達市は小学校の卒業式を強行した。母たちがPTAを通し不安の声を寄せたが、聞き入れられることはなく。ちなみにこの年に卒業式を行ったのは、中通りの県北地域では伊達市と大玉村おおたまだけだ。

同記録には「市内各小学校の卒業式を行う」と並んで、こう記されている。

「各課1人の応援要員を出して安定ヨウ素剤の袋詰め作業を始める」

小国小学校の場合、式は卒業生だけで行われた。体育館が被害に遭ったために、音楽室での式となった。佐枝子にとっては一番下の優斗の卒業式だ。直樹から始まり長年通った小国小と最後の日。「卒業式はやってほしかった」と佐枝子は参列、優斗の門出を祝った。

この時の小国小がどれほどの放射線量だったのか、今となっては誰もわからない。

「だて市政だより 災害対策号」（以下、「だて市政だより」に小国小の線量が掲載されたのは、4月15日号（5号）が初めてだ。そこには5・78マイクロシーベルト／時という数字が

あった。卒業式の時点では放射性ヨウ素もあったわけだから、併せて考えれば、どれほどの高線量になっていたのだろうか。伊達市はそこに小学生を呼び寄せたのだ。

4月19日に発表された、14日の文科省調査「福島県学校等空間線量及び土壌モニタリング」によれば、郡山市、福島市、本宮市、二本松市、伊達市の調査対象校で最も空間線量が高いのが小国小学校だった。校舎外平均1メートルの高さで5・2マイクロシーベルト、50センチで5・6マイクロシーベルト。2番目に高いのが同じ伊達市保原町にある、富成とみなり小学校。1メートルで4・6マイクロシーベルト、50センチで5・0マイクロシーベルト（すべて毎時）。富成地区ものちに「特定避難勧奨地点」が設定された場所だ。

ちなみに原発事故前の福島県の空間線量は、0・035〜0・046マイクロシーベルト／時（平成22年度『原子力発電所周辺放射能測定結果報告書』）。

佐枝子は振り返る。

「あの頃からだよ。喉がずっとイガイガしてんの。それはみんな、言ってた。子どももずっとそうだった。マスクして寝てるのに、イガイガするの。鼻の中は今も、変。鼻汁はかんでも出ないし、鼻くそがたまる。とつてもとつてもすぐたまる。粘膜が変なのが、ずっと続いている」

市議・菅野喜明がいろいろ手を尽くして、ようやく小国地区の線量を測ることができたのは福島民報の小国小に関する報道に先立つ、3月29日のことだった。

小国ふれあいセンターで、7・24マイクロシーベルト／時。

同日、飯舘村役場が8・61マイクロシーベルト／時。飯舘村とそう変わらない数字だった。伊達市が広報誌で市内各地の放射線量を公表したのは、4月5日号（「だて市政だより」3号）からだ。小国ふれあいセンターは、2・96マイクロシーベルト／時（4月3日測定値）。「だて市政だより」4号（4月8日発行）では、3・89マイクロシーベルト。以降、高くても4・40（4月9日測定値）などの値となっている。

菅野は早口で一気に話す。

「最初の7・24マイクロシーベルトは嘘ではないと思う。これがなぜ、一気に下がったのか。あまりにも半減期が早すぎる。ふれあいセンターのどこを測ったのか。行政が対応を始めたことによって、隠蔽というより、下げたのだと思う。あくまで推測ですが」

菅野は3月31日に、県庁にあった原子力災害現地対策本部・オフサイトセンター（緊急事態応急対策拠点施設）へ行き、原子力安全課防災環境対策室の室長に訴えた。2日前の数字が菅野を駆り立てる。知らぬ間に怒鳴り声になっていた。

「小国の線量が相当高い。高いところがあるのだから、ちゃんと測ってくれないか。とにかく小国にきて、ちゃんと測ってください。小国にも避難とか、あるんじゃないですか」室長の答えは淡々としたものだった。

「今、点的の調査をしている。面的調査の時にはやりますよ」

菅野はその足で、米の作付け制限を検討している県の農林水産課に出向いた。

「小国の土壌調査をしてほしい。耕運する前にかく、土壌調査だ」菅野は言う。

「当時、ある程度、勉強したんです。チェルノブイリでは汚染土壌は剥がしたという。小国が飯舘村並みの汚染なら、作付けが始まると土が混ざってしまう。この時期なら1センチか2センチ、表土除去をすればいい。混ぜちゃうときれいな田んぼや畑で農業ができなくなる。だからなんとしても土壌調査をして、作付けを止めたかった。県の答えは市と協議してやるということでしたが、結局、やってもらえずに、土壌調査は月舘町だけで行われた」

「だて市政だより」4号にはこうある。

「4月6日、県より土壌調査の結果が発表されました。市内では月舘地域以外について作付自粛が解除されました。今まで控えていた田畑の耕うん作業や植付け作業を、計画的に進めてください」

菅野は、「文部科学省及び米国DOEによる航空機モニタリングの結果」（80キロ圏内のセシウム134、137の地表面への蓄積量の合計）という、蓄積量により色分けされた図を見せしてくれた。これは次章で詳述する、小国地区の「特定避難勧奨地点」設定において大きな示唆を与えるものとなるのだが、4月29日段階では、小国地区は飯舘村や飯舘村と接する伊達市月舘町、南相馬市の一角と同じ、「黄色」に塗られている。小国はまるで、「黄色」の飛び地。

「黄色」が示す値は、以下のものになる。

100万〜300万ベクレル/m²。

菅野は締め口調で振り返る。

「あの時の作付け制限の基準は、土壤1キロあたり5000ベクレル。小国の値はケタが違う。測りもしないで1平方メートル当たり300万ベクレルある土地を耕して米を作ったから、小国では秋、基準値超えの500ベクレルどころか、800ベクレルを超える米がばんばんできた。なかには1000ベクレル超えもあった」

菅野は自嘲気味に言う。

「多分、アメリカの調査で県はわかっていたと思いますよ。高線量の飛び地が小国にあると。結局、6月の勧奨地点設定まで何もしなかった」

(3)

まさか数ヶ月後に、自分がいくつものテレビカメラの前に立つことになるうとは、椎名敦子しいなあつこ（仮名、当時38歳）には思いもしないことだった。

霊山町下小国で自営業を営む家に嫁いで12年、福島市内で生まれ育った敦子にとって、小国は「お嫁に来なかったら、わざわざ行く場所ではない」土地だった。

2人目の子どもが生まれて同居を始めた時には、曾祖父に曾祖母、祖父母、義妹、夫婦に子ども2人という大家族だった。

「外を歩いていると、みんな、あたしを知っているの。あたしは誰も知らないのに。『あなた、椎名さんとおのお嫁さんでしょう』って声かけられる。最初は緊張しました。それだけ、地域の力が強い土地です」

自宅は国道115号に面し、同じ小国でも早瀬道子や、まして上小国の高橋佐枝子が住む山あいと違って、近所に商店もある小国の中心部に位置する。ここで代々、自営業を営んできた。その日、小国小5年の長男・一希かずき（仮名、当時11歳）と2年の長女・莉央りお（仮名、当時8歳）は学校へ、夫の亨とむ（仮名、当時38歳）はお客のところへ。敦子は自宅にある事務所で、事務作業を行っていた。

「携帯の地震速報が鳴ったから、事務所の隣の茶の間にいるひいばあちゃんに、『ひいばあちゃん、地震、来るってよー』って声かけたら、すぐに揺れだした」

今まで知っている地震と大違いだった。曾祖母は94歳、敦子はすぐに駆け寄った。

「ひいばあちゃんの手を握って、倒れそうなテレビを押さえていた。終わったと思ったら、またすぐにグラグラ揺れだして、私、その時初めて、家が壊れるのかなって思った。ものすごい恐怖を感じて、ただただ、いつ止まるんだろうって思ってた。びっくりするほど長い揺れで、ひいばあちゃんとテレビとつながっている状態で、もう動けなかった」

一旦揺れが収まった後、敦子は犬を抱いて外に出た。

「外に出て、家の前に呆然と立っていた。私、家が揺れる音を初めて聞きました。増築した部分ぶんが、がしやん、がしやんと離れては戻る。ああ、壊れると思ってすごく怖かった」

長男の一希は教師が付き添って徒歩で帰宅し、長女の莉央は同級生の母親が車で連れてきてくれた。小国小まで車で5分の距離だが、子どももの足では30分はかかる。

子どもと一緒に家の中に入って、テレビをつけた。画面には、見たこともない光景が広がっていた。

「仙台空港の津波の映像にびっくりして、これが実際起きているのかと信じられなかった。津波で流された人たちを思えば、私たちは幸せだって思いました。家もあるし、家族もいる。私たちははずつといいって」

地鳴りというものを初めて聞いた。ゴゴゴゴと地を這ってくるような、不気味な音が一晩中、地の奥底から響いてきた。

携帯からは幾度も地震速報が鳴り響く。そのたびに恐怖が走り、テレビをつければ全チャンネルが、「ぽぽぽぽん」の「へんな絵」（公共広告機構のCM）ばかり。そして繰り返される津波のニュース。

「あの夜、気持ち悪いほどの閉塞感を感じました。新幹線も在来線も高速道路も止まってしまって、ああ、私たち、福島から出られないんだなって思いました。ニュース以外のテレビをやっていないっていうのも、子どもには非現実なものを見せてあげたいのに、そういう自由もなくて、息が詰まりそうな、なんとも言えない圧迫感がありました」

夫の亨はこの日の夜から、福島第一原発の状況をネットで逐一追っていた。しかし、敦子にとってその時には、津波が最大の関心事だった。

「主人は原発が危ないとか言うけど、そんな話、全然、本気で聞いていなかった。絶対、ここまで来ないでしょう、放射能なんてって。うちは幸せだからいいじゃん。家もあるし、家族も無事だし。それより、名取で何百もの遺体があがったってどういうことだろう、何が起きたんだらうって恐怖でした。しょっちゅう、遊びに行っていたところだし、そっちの恐怖の方が大きかった」

翌日ももちろん、原発のニュースばかり。枝野官房長官が、「直ちに健康に影響がない」と繰り返すのを、敦子は他人事のように眺めていた。

ここでふと、言葉を置いて敦子は言う。

「あれ？ あたし、本当に心配するようになったのはいつからだっただろう」

事故後1年弱、鬱うつになるぐらい、心配でたまらなかつた。見えないけれど、ここにもあそこにも放射能があつて、どうやって子どもを守ればいいのかって日夜、押しつぶされそうな日々だった。出口のないトンネルに一夜にして押し込まれたような毎日を、ほどなく敦子は過ごすことになる。

強烈に覚えているのは、長男の一希が泣き喚いたことだった。

「1号機だったか、爆発の映像をテレビで見たとき、一希が『この世の終わりだー！』って泣いたんですよ。そんなこと、誰も教えていないのに。だって私たち、原発は安心して安全なエネルギーって教わってきたんだから」

泣き叫ぶ長男を、「大丈夫だよ、ここまで来ないからね」と慰めた。敦子はふっと、自嘲気味に笑う。

「子どもの言う通りになっちゃった」

家の外に「何か」があると実感したのは、亨の知り合いがガイガーカウンターを持って来た時だ。1週間後のことだった。初めて見る機械、それがまさか、ほどなく馴染みものになつてしまうとは。

「線量を調べられる機械だつて説明されて、外で電源を入れたらすぐにピーピー鳴って、地面

の近いところで5とか6、1メートル上だと3、家の中だと0・15。だから、家の中は安全なんだと言われました」

何が危険で何が安全なのかはよくわからない。その数字が意味するものもよくわからない。ただ初めて、見えないけれど目の前に、「あつ、何かがあるんだ」ということはわかった。外と家の中の違いも。

「それからは子どもをなるべく、外に出さないようにしました。出す時はテレビで言っているように、マスクして長袖長ズボン。どこまで効果があるかはわからないけど、テレビでそう言っているのだから」

莉央は言うことを聞いて家で過ごしていたが、一希は親の目を盗んではちよこちよこ抜け出して外へ行った。

「その年の冬の甲状腺検査で、一希はA2、莉央はA1。だから、あの時、家からちよこちよこいなくなっていたからだなんて思いました」

福島県は3月11日時点で0歳から18歳を対象に、2011年10月から甲状腺検査を実施した。後に詳述するが、判定はABCの3種に分けられ、BとCは二次検査を行う。その必要がないAは、さらにA1とA2に分けられ、A1は結節や嚢胞のうほうが認められなかったもの、A2は結節や嚢胞が認められたものに分けられる。同じ家に住むきょうだいでA1とA2に分かれたのは、事故当初、外に出ていたかどうかの違いだと敦子は考えている。

地震の後、学校は4月5日まで春休みとなった。卒業式は6年生だけで行うことになったが、敦子はPTA役員だったこともあり、「在校生もいなくてかわいそうだから」という思い

で出席した。

「本当は親同士で意思の疎通をはかりたかったんです。心配している人がどれだけいるのか、お母さんたちみんながどう思っているのか、私だけが不安なのか、知りたかった。でもそれを口に出すのは難しかった」

その頃から、「数字」が日常生活にちらほら現われるようになった。

「だて市政日より 災害対策号」の1号が発行されたのは3月21日だ。そこで市長は「20キロメートル以上離れた地域の住民が放射線による健康被害を受けることはない」と市民に「安全だ」というメッセージを送った。

だが同号で記されていた、保原町にある伊達市本庁舎敷地内の放射線量は、このような値を示していた。

3月17日	7・35マイクロシーベルト／時
3月18日	7・55マイクロシーベルト／時

小国よりずっと線量が低いとされる保原町でさえ、これほどの高線量を記録していた。

とはいえ、こうした数字がポンと投げ出されても、何を意味するのかは敦子だけでなく、当時、誰だっかわかってはいなかった。

同時期から地元放送局のテレビ画面には、テロップで線量が毎日表示されるようになる。

「最初は24とかだったから、それが10に下がってよかったねって喜んでいたんです。あの時は

モニタリングポストが福島にしかなくて、そのポストがどこにあるのかも、数字の意味もわからない。後になって、勸奨地点の話が出た時に避難の基準が3・2だったから、あれ、めっちゃくちや高かったんだってわかったのですが」

5や6という数字が高いのか低いのか、子どもにどう影響を与えるものなのかはわからな
い。しかし新学期を迎えるにあたって、敦子は子どもたちを学校まで歩かせたくはなかった。
外に「何か放射能」がある以上、徒歩通学をさせたくない、それはどうやっても譲れない思
いだった。集団登校で一緒に行く親たちに電話をした。

「みなさん、仕事で忙しいと思います。うちは自営なので時間が取れますから、行きと帰り、
うちの班の子どもたちを車で送迎したいんです。させてください」

果たして、どこも同じ思いだった。みんな、不安だったのだ。敦子が主に担ったが、親たち
が協力して市が小国小の子どもに通学バスを出すまでの1年間は車による送迎を続けた。

「自分の中で今でも、これは一番よかったって思っています。そこだけは、悔いがないんで
す。一度も、子どもを小国で歩かせていないですから。それも、新学期の最初から」

小国小学校では新年度のスタートにあたり。当面、屋外の栽培活動は控え、体育の授業は屋
内で実施する方針を、始業式の「お便り」で保護者に伝えた。

4月13日、伊達市教育委員会は放射能に関する指針を発表した。

「体育、部活動は屋内で。栽培活動は控える。登下校時など外出時は帽子、長袖、マスクを着
用する。外から戻った時はうがい、手洗い。教室の窓は閉める、換気扇、エアコンは使用しな
い」など。

4月20日、伊達市のサイトにアップされた小国小学校の「環境放射線測定値」が、保護者に学校から伝えられた。

「測定場所 校庭中央：地面から高さ1メートル地点」

4月10日 5・78、11日 5・77……と連日、5マイクロシーベルト超えという数字が並ぶ。校庭での活動をしなはいえ、子どもたちはこの場所に毎日、登校していたのだ。1年生から6年生まで全校児童57名という山あいの小さな学校で、原発周辺自治体の避難に紛れる格好で、このような事態が起きていた。

敦子は母親たちと協力して、通学路の放射線量を測定して回った。

「学校が始まってすぐに始めました。民主党の議員さんから線量計を借りて、お母さんたちで手分けして、子どもが実際に歩く場所を測ったんです。どこが高いか、知っておこうと。普通に3マイクロとか4マイクロはありました。風が吹けば、みるみる数字が変わるし、どの数字を信じていいかわからない。でも測ったことによつて、放射能が小国にいっぱいあるというのがわかったんです」

自分たちの測定した数字と、新聞に載っている避難の目安となった数字を比較すれば、小国の数字が無視できないほどに高いことに否応なく気づかざるを得ない。

隣の飯館村では「計画的避難区域」というよくわからない名称のもと、全村避難の動きが始まっていた。

なのに、小国では子どもたちは「普通に」学校へ通っている。みな、長袖・長ズボン、マスクを着用するという出で立ちで。

「こんなに高いのに、なんで、誰も言ってくれないの？　なんで伊達市からは何も無いの？　逃げまじょうとか言ってくれないの？」

敦子には理解できなかった。なぜ、市の広報車が来て注意を喚起しないのか。子どもを安全な場所へ移してくれないのか。それをするのが行政ではないのか。そうやって住民は守られるべきものではなかったか。

しかもこの時期、伊達市は浜通りからの原発事故避難者を受け入れており、霊山や小国の公民館に避難者たちが身を寄せていた。受け入れに当たって、消防団が各家庭を回り、毛布や布団を集めている。

「わけがわからない。なんで、ここに避難してくるの？　ここも線量が高いのに」
わが子が通う小国小学校が、福島県内の避難区域以外で――すなわち原発事故後も子どもが通っている小中学校の中で、最も高い放射線量を有していると知らされたのは、伊達市からでも学校からでもなく、4月20日の文科省発表を受けた「福島民報」の報道記事だった。

「衝撃でした。目を疑いました。何より理不尽だったのは、教えてくれたのが新聞だったという事です。ふざけていると思いませんか」

当事者でありながら、自分たちが身を置く自治体から何のアクションもない。子どもへの被曝をなんとかしようとしたか、見て見ぬふり、まるでほったらかしだ。

今まで漠然と信じていたもの、国や県や市は自分たちを守ってくれるという信頼が、足元から崩れていくような思い。敦子はこれから身をもって、理不尽さを知ることになる。

「伊達っていいところだよねー。山もあるし、1時間ちよつとで海にも行けるし、もし原発の事故があっても、離れているから影響もないしねー」

ママ友の集まりで、よくこんな話をしていた。みんなで「そうだよねー」ってうなずいて。水田奈津（仮名、当時47歳）が信じて疑わなかった無邪気な思いが崩れ去ったのは、「あの日」からどれだけ経った頃だろう。

「徐々に徐々に、あれ？ って、おかしく思うようになっていきました」

伊達市保原町郊外、田んぼや果樹園、畑が広がる一角に水田家はある。半田（仮名）銀山で栄えた桑折町の半田山や、霊峰・霊山を望む、盆地の真ん中にあたる平野部だ。

旧5町が合併してできた伊達市だが、市長を輩出し、伊達市役所が置かれた保原町が今や名実ともに伊達市の中心となっている。他の町ではさびれがちな飲食店などの繁華街も健在だ。水田家は保原の繁華街から車で5分ほど、のどかな田園地帯にある。

水田家は、主婦である奈津（仮名、当時53歳）と夫の渉（仮名）の両親に子ども2人の6人家族だ。渉は会社員として働きながら、休みには家の周りがある畑を耕し、農作物を作ってきた。もともと農家の生まれだった。

伊達市ではこの日、中学校の卒業式が行われ、奈津と渉は長女・ひかり（仮名、当時15歳）の式に出席し、3人で近所のラーメン店で昼食を食べて1時半には帰宅した。奈津は1階の居

間で、ひかりは2階の渉の部屋で父と一緒にのんびりとした午後を過ごしていた。

突然、渉と奈津の携帯から、地震警報が鳴り響く。

「ひかり、地震が来るから、おまえは下に降りとけ」

ひかりが階段を降りてきたちようどその時、家が揺れ始めた。奈津は咄嗟とつさにテーブルの下に入って娘を呼んだ。

「ひかり、おいで！」

奈津が言う。

「ものすごい揺れなんです。ゆっさ、ゆっさって、何、これ？　って。最初は東西に揺れて、次に南北に揺れた。あたし、東京が危ないって前から思っていたから、『東京、終わった。東京、壊滅』って揺れてる間、ずっと思っていたんです。娘はめったに『ママ』なんて言わないのに、『ママ、ママ』ってしがみついてきました」

それでもひかりは気丈に、テーブルから出てさつと窓のカーテンを閉めた。ひかりは言う。

「すごい横揺れで、ガラスが割れて、それが当たって死ぬと思ったから」

吊り戸棚から食器ががちやん、がちやんと飛び散っては割れていく。

「食器が割れるたびに、お母さんが『あーあ』ってため息ついて。何度もそのたびに」
ペンダント式の照明がゆっさゆっさと揺れ、火事になるかと思った瞬間、すべての電源が落ちた。

揺れが収まって、2人は外に出た。すでに祖父母は外に出て、2階を見上げている。2階のベランダから、渉が「はしご、はしご」と叫ぶ。渉が言う。

「ギターを守ろうと抑えていたら、いきなりプリンターが飛んできて、俺の腰に当たったの。そこから、めっちゃくちゃ。内側に開く扉に本棚が倒れて本がどどつと重なり、荷物も倒れて、扉が開けられなくなつて部屋から出られなくなり、はしごで2階の窓から外に出たんです」
これでもうやく、家にいる全員の無事が確認できた。

「あつ、真悟しんごだ！」

3人、同時に思った。小学3年の真悟（仮名、当時9歳）を迎えに、渉とひかりは小学校に走る。冬の雷が鳴り響き、雪が狂ったように舞い散る。空にはヘリコプターが何台も飛び、救急車と消防車のサイレンが鳴り響く。一体、何が起こったのか、学校へ急ぐ渉には何もわからない。

すでに校庭には、子どもたちが集められていた。みんな、ひどく怯おびえていた。真悟を真ん中にして包み込むように、ひかりと渉が手をつなぎ帰る途中、真悟はわんわん泣いた。必死で恐怖を我慢していたからだ。奈津は、あとで真悟から聞いた。

「障害のある子が『こわい、こわい』って言ってるから、真悟は自分もこわいけど我慢して、その子の手を握っていたんだって。お父さんとお姉ちゃんが迎えにきて学校の外に出て、ようやく泣けた。その時の恐怖のせいかな、今でも真悟は地震になると気持ちが悪くなる」

家の中はめっちゃくちゃ、足の踏み場もない。子どもたちが「家の中はコワイ」というので、この日、一家は庭にあるビニールハウスで寝ることにした。

「年寄りが勝手にフラフラすると危ないし、とにかく、みんなと一緒にいようと。たまたま使っていない替えのビニールがあったので、それをハウスの土の上に敷いて、布団をその上に持

つてきてジャンパーを着たまま潜りこんで、そのまま寝ることにしました。そんなに寒くなかったですよ。石油ストーブを入れて、あつたためたから。むしろ結露ができたほど」

伊達市ではここ保原の一部と梁川町のライフラインが、地震でズタズタになった。電気は止まり、水道もガスも使えない。

ここから、水田家のサバイバル生活が始まった。奈津が言う。

「もともとよくバーベキューをやっていたので、外での煮炊きには慣れていたんです。冷凍庫に肉とか魚とかいろいろ食材は常備してあったし、水も買ってあった。この日の夜はインスタントラーメンを茹でて、翌日は七輪でお米を炊いてみたらうまくいったので、これでご飯も大丈夫だって。バーベキューのコンロで木炭を使って魚を焼いたり、石油ストーブに乗せておけばお湯も沸くし」

問題は、情報だった。11日の夜にはすでに、原発は深刻なことになっていた。20時50分、県から半径2キロの住民に避難指示が出され、それから1時間も経たずに、今度は国から半径3キロ圏内に避難指示、半径3〜10キロ圏内では屋内退避の指示。

原発どころか津波の被害さえ、ビニールハウスの住人には正しく伝わってはいない。「電気が止まっていたので、直後はラジオを聴いていたけど、電池を温存しないと聞けないから消したり、つけたり。携帯電話も充電がなくなるのがこわくて、ワンセグでテレビを見れたけれど、見る気にもなれない」

それでも切れ切れに入ってきて来るのは、今まで聞いたことがないことばかり。

「一体、何が起きたんだらう。耳から入ってきて来るのは津波のことばかりだけど、でも何が

起きているか、見当もつかない。野蒜^{のびる}海岸に何百もの遺体って、一体、どういふことなんだろ
う。ラジオで言っていること自体、訳がわからない」

何台もの自衛隊のヘリコプターが飛び交い、空の爆音は止む^やことがない。街では緊急車両の
サイレンが鳴り響く。冬に雷など起きない土地なのに、狂ったように雷鳴が轟き、雪が猛烈な
勢いで打ちつけ、大地はゴゴゴと不気味な音を立てる。まさに、天変地異の様相を呈して
いた。しかし、世の中に何が起きたのかは、まったくわからない。

とにかく家族みんなが寄り添って、食べて、生きていくことだ。それが、水田夫妻にとって
の当面の差し迫った課題だった。

12日に1号機が爆発しているが、水田家では誰も知らない。この日、ひかりと真悟は外で無
邪気にサッカーに興じていた。

日本全国で原発が一体どうなってしまうのかと刻一刻、固唾^{かたせ}を飲んでテレビ画面を注視して
いたその時に、数日後に放射能汚染の「当事者」になってしまふ人たちが、全くと喋っていい
ほど情報の蚊帳の外に置かれていた。

「とにかく、ここでサバイバルをするので精一杯。余震もすごいし、体力を温存するしかない
よねって」

結局、ビニールハウスで丸2日過ごした。3日目によく、家の中を掃除して、1階の一
間を片付け、寝る場所を作った。そしてその翌日に、電気が復旧した。14日のことだった。奈
津は言う。

「14日、新聞で爆発の写真を見た気がするんですよ。煙が出ているものを。えっ？ 原発、爆

発したの？ っ。原発周辺の人がこっちへ避難してきているっていう話は、どこからか流れてきた。だけど所詮、私たちにとっては他の地域のことなんです。山がいくつもあるし、離れているし、大丈夫だよねって」

ただし、ひかりの反応はちよつと違っていた。ひかりは小学生の時に子ども向けの電気の勉強会で原子力発電を知った時から、「危ないものを使っているんだ」という認識を持っていた。小学6年の夏休みに、新聞記事を元にした自由研究で選んだテーマは、「プルサーマル」。福島第一原発3号機に導入されたが、それは、より危険性の高いものだというのを知った。奈津は言う。

「娘は勉強して知っているからか、すごく怖がっていました。爆発したのなら危ないから、外に出ないようにしようって。窓も開けないで、換気扇も回さないでって」
ひかりはこう振り返る。

「原発がやばいらしいと聞いた時、なんか、パニックになりました。えー、やばい。どうしよう、どうしようって。すごく怖かった」

思い出したのが、「暇だから、何気なく見ていた」小学校の保健の教科書。巻末に原発で事故が起きた時の対処法が書かれてあった。ひかりは両親に訴えた。

「窓とか換気扇に目張りをしないといけないし、ごはんはラップがかけてあって冷蔵庫に入っているのしか食べちゃだめで、エアコンを止めないと、外の空気が入ってくる」

涉はひかりを叱責した。それは興奮状態の娘を落ち着かせるためでもあった。

「今、原発で避難している人がいるんだぞ。必死で作業している人がいるんだぞ。そういう人

のことを考えろ。俺らのことよりも」

のちに、渉は思った。

「結局、ひかりの言うことが正しかった」

奈津はひかりの言葉に従い、窓を目張りし極力開けないようにした。以降3年間、水田家では窓を開けることなく過ごすことになる。

3月16日、この日、福島県は予定通り、県立高校の合格発表を行うという。ひかりはすでに2月、一期試験で県立高校の合格が決まっていた。進学校で偏差値も高く、ひかりの憧れの高校だった。ひかりと奈津には、発表を見に行くことへの躊躇ちゆうちよがあった。爆発した以上、外に出るべきではないと。

実際、前日の15日、すでに福島市では原発爆発後、最大の空間線量を記録していた。

その要因は3月15日の夕方、福島第一原発周辺から東南東及び南東の風が吹いたことで、この日、北西方向に高濃度汚染地帯が作られたのだ。

もっとも顕著なのが飯舘村で、18時20分に44・70マイクロシーベルト／時を記録。この時、飯舘村に隣接する霊山町小国にも放射性物質が降り注いだ。

飯舘村を通過した放射性物質が次に向かったのが、福島市だった。19時30分に、福島市は24・08マイクロシーベルトという最大値を記録する。

しかもこの日、中通りでは雨が降っていた。山深い小国では、それが雪になった。この雨によつて放射性物質が降下、中通り一帯に放射性物質が沈着するという不幸が起きた。

繰り返すが、県立高校の合格発表はこの翌日のことだ。

中学校を卒業したばかりの生徒たちが幾人も、屋外の掲示板で、自分の合否を確認するために県内各地を歩き回った。放射性物質を警戒するアナウンスは何もなされず、無防備なまま
で。

ひかりは既に合格が決まっていたこともあり、無理して外に出ることもないだろうというのが、本人と奈津との一致した考えだった。

「だから、高校に電話したんです。阿武隈急行は止まっているし、ガソリンもないから、発表を見にいけないと。では、来られる時でいいと高校では言われたのに、それが中学に伝わって
いなかった。中学から早く手続きに行ってくれと電話があった」

努力してようやく合格した、希望の高校だった。こんなことで合格が流れたのでは元も子もない。2人は手続きに出かけることに決めた。18日、涉に奈津の実家がある福島市内まで送っ
てもらい、福島交通飯坂線で最寄り駅まで行くことにした。

「帽子をかぶってマスクして、メガネをかけて手袋をして、変な格好だけど、それでいいよね
って。駅からは歩くしかないのよ」

精一杯の防御をして出かけたが、それでも今、奈津はこの日を悔いている。何でもいいから
理由をつけて、ひかりを外に出すべきではなかったと。

そうであっても知識があったから、ひかりは「防護」できた。

「ひかりの中学の同級生達は、阿武急が止まっているから、自転車でバス停まで行って外でバ
スが来るのを待って福島に出て、駅から歩いて見に行っただけ。帽子もマスクも何もしない
で、そのまま」

水田家では、3月中は子どもを極力、外に出さなかった。

しかしこの時期、ライフラインが寸断された保原や梁川には、給水の列に並んだり、食料の買い出しに自転車で走り回る中学生や高校生たちの姿があった。そうやって、親の助けになろうと子どもたちは働いていた。マスクもせず帽子もかぶらず、何一つ放射能対策を取らずに外に長時間いたことになる。

伊達市は23日に小学校の卒業式を行った。真悟たちの小学校は在校生も参加することになっており、3年生の真悟も式に出なければならなかった。

「あの時、卒業式をやったのはこの辺では伊達市だけなんです。心配なら車で送ってくださいって学校がいうから、真悟は車で送って行きました。卒業生をみんなで送るアーチは毎年、校庭に作るのですが、さすがに体育館でやったというけれど」

ただしあの時、奈津にも涉にも自分たちの生活圏にまさか、それほど多くの放射性物質が降り注いだとは思ってはいない。やはりまだどこか、遠くの場所の出来事だった。

「あの時点で、この辺が高いんだという意識は全然なかったです。ひかりの同級生なんて、暇だから川遊びをしたというし。だから、どれだけ初期被曝をしたのか、わからないんです。もちろん、逃げるっていう頭もないですよ。市の広報車が回ってきて、注意を喚起するわけでもなかったし」

のちにわかったことがある。実父の書道教室の生徒だった年配の女性がふと、奈津の母に漏らした言葉がある。それは事故から半年ほど経った頃のことだった。その女性の息子は福島県の職員だ。奈津の母は今も、この女性の言葉を忘れない。

「震災があった次の日だったか、その次くらいだったか、息子から電話があったの。『今すぐに、貯金通帳と全財産を持って逃げろ』って。『そこにいいたら、だめだから』って」

(5)

この日は、父の検査の日だった。川崎真理（仮名、当時38歳）は、だから忘れもしないと振り返る。

「3月8日に急に入院することになって、でもそれはあくまで検査のための入院でした。11日の午後に検査をすることが決まっていました」

保原町で育った真理は、1997年に、地域は違いますが同じ保原町に住む夫のもとへ嫁いだ。周囲には見渡す限り田畑や果樹園が広がり、盆地を取り囲む山々の前に遮るものは何もない。360度、気持ちよく視界が開けた平野部に、川崎家はある。「ここだから、お嫁に来たのかも」と真理は冗談めかして笑う。

結婚後しばらくは夫の両親と同居していたが、事故の2年前に同じ敷地内に家を建て、子ども2人と夫婦4人で始まった新生活は快適なものだった。

長男の健太（仮名、当時10歳）はやっと授かった子どもだ。同じ年の末に生まれた長女・詩織（仮名、当時9歳）は学年は違うものの、8ヶ月しか離れていないという年子。

2人の赤ん坊を一緒に育てるといふ大変な子育て期、真理にはこの時期の記憶がほとんどない。何が流行ったかもわからないのは、テレビを観る時間すらなかったからだだった。

子育てが一段落した真理は、ガス検針の仕事に就いた。幼い子どもがいる身には時間の融通がきく仕事がありがたかった。2つ年上の夫は隣町の工場に勤務していた。

その日は検査の父に付き添っていた。

「ずっとそばにいたかったです。子どもたちが学校から3時10分に帰って来るので、家に戻ろうと病院を出て、ドラッグストアに寄ったんです。ボディソープが切れていたから」

地震に遭ったのは、そのドラッグストアの店内だった。

「突然、揺れたんです。私、仕事のしすぎで目眩めまい?」と思ったけど、目眩じゃなくて、棚からどンドン物が落ちてきて、通路がふさがってしまい動けなくなった。もうひとりの女性の客が恐怖で全く動けなくなっており、その人のところに上からどンドン物が落ちてくるので、もうひとりの女性客とその人を引っ張って、3人で『どうしよう、どうしよう』と震えていました。天井に吊りあっていたガラスのようものが割れて落ちてくるし」

テレビで見た、大地震の瞬間映像のワンシーン。それが目の前で起きていた。店員に助け出されたのは、最初の揺れがおさまった後だった。

家に帰ろうと車を発進したが、道は盛り上がり、信号は止まっている。あちこちの家から瓦が落ちる音がする。

「ようやく家に帰ったら、じいちゃんが庭の桃の木にしがみついていた。立っていられないからって。家の中からいろんな割れる音が聞こえてきたんですが、家の鍵は開けないで、そのまま、子どもの学校へ急ぎました。校庭で子どもたちみんな泣いていて、自分の子と近所の子を乗せて送り届けて……」

家の中は物が散乱して、足の踏み場もない状態だった。真理にとって何よりショックだったのは、新築してまだ2年も経っていない、「念願のマイホーム」の変わり果てた姿だった。「地震に強い」がキャッチフレーズの家を選んだのに、1階の居間の壁が割れて大きな亀裂がいくつも走り、壁紙は剥がれ落ち、無残なありさまを呈していた。真理は当時を振り返りながら、そばにいる娘の詩織に笑う。

「お母さん、人生、もう終わったって思ったよ。苦労してやっとな家なのに、何のためにも、これまでやってきたんだらうって……」

それでも「地震に強い」鉄骨の家、先ほどの水田家のように「家の中にいるのがコワイ」と、外で過ごす必要はなかった。

「鉄骨のフレームでできている家なので、そうは壊れないだろうという安心感がありました。うちの地区は停電になったのですが、自家発電できるようになっていたし、エコキュートで水は確保されてあるので、蛇口の水は止まっても家の外のエコキュートのタンクから水を取り出せば何とかなるし」

夫も無事に帰宅し、家族が全員揃ったので、真理は実家にひとりでいる母の様子を見に行っ

た。「実家は電気が通っていたので、母はずっと津波の映像を見ていたそうです。母は大丈夫だし、父も病院で安全なので家に戻ったのですが、この日は津波のことも、まして原発のことも何もわかっていなかった」

そんなことよりショックだったのは、この日の午後に予定されていた父の検査が、地震によ

り延期されたことだった。

「検査して治療して、家に帰ってくるはずだったのに、検査もできずに、そのままずるずると入院していて、父は刻一刻と状態が悪くなっていました。そのうちに動けなくなつて……。元気に家に帰るものだとばかり、思っていたのに」

父は家について戻ることではなく、5月初旬に亡くなってしまうのだが、ゆえに地震後の真理の心を覆っていたのは、ひとえに父の容態だった。

「もちろん、地震があつて、津波が起きたというのはわかっていました。3月13日に、祖母の四十九日法要があつたのですが、その時はまだ原発が爆発したのは知らなくて、お寺で親戚としゃべつたのは、地震がすごかつたねつてそれだけです」

爆発を知つたのは、14日のこと。でもそれは遠い場所でのことだった。

「私たちは60キロも離れているし、テレビで見た同心円の中には入っていないから、うちらには関係のないもんだと思つていました」

真理がガス検針の仕事を再開したのは、その14日のことだ。

会社から「地震でガスボンベが外れていないか点検するよう」に連絡が入つたため、14日の午後に保原町柱沢地区を車で点検に走つた。車を停めては1軒1軒、ガスメーターの場所に行くという確認作業を午後目一杯かけて行つた。点検車には特別に、ガソリンが支給された。

翌15日には、自分の担当エリアである上保原と富成地域を1軒1軒、同じように車を近くに停めては歩いて点検と検針に回つた。

「後でわかつたんですが、私が回つていたのつて、全部、線量が高い地域ばかりだったんで

す。15日は仕事が終わった後に、顔がものすごくひりひりして、どうしてこんなに痛いんだろうって。まさか日焼けじゃないだろうって」

富成地域は、年間20ミリシーベルトを超える地点があるとされ、「特定避難勧奨地点」が設定されることになる地域だ。上保原は、のちに詳述する区分けによればBエリアだ。真理は高濃度の汚染をもたらした放射性物質が降っている真っ只中に、その場所を身ひとつで歩いていった。

4月10日段階だが、「だて市政だより」5号において、「市内小中学校の放射線量測定値」でこのような数字が記録されている。

上保原小学校 2・62マイクロシーベルト／時

柱沢小学校 3・80マイクロシーベルト／時

富成小学校 5・14マイクロシーベルト／時

真理は自分のすぐそばに、高い放射線量を放つ放射性物質があるとは夢にも思わない。目の前に広がるのは、いつも通りの風景なのだ。

「原発周辺からこっちへ人が避難してきているわけだから、ここは安全なんだと思いました。原発が爆発したらどうなるかという知識は何もないですよ。せいぜい、チェルノブイリは大変だったという程度。私たちの地域は、そもそも原発がないのだから分からないですし、同心円から離れているから大丈夫だと思っていました」

この時期、茨城にいる兄から「保原は放射能、大丈夫なのか」と電話が入ったが、真理はこう答えている。

「みんな、普通にしているよ。水汲みしたり、普通に歩いているからなんともないよ」
真理は時間が許す限り、父の病院に見舞いに行った。

「仕事のこと、父のこと、そして子どもに家事と、毎日、何が何だかわからないまま、日々が過ぎていきました。それでいっぱいだった気がします」

それでも家を留守にする時には、子どもたちに「できるだけ、家の中にいるように」と注意をして出かけた。

「どこからか、あまり外に出ない方がいいと聞いたので。息子はインドア派なので家でゲームをしているからいいのですが、娘はさーっと外に出ちゃう。外で遊ぶのが大好きな子で、『家の中に入っていないとダメだ』と言っても親の目を盗んで外に行っちゃやうんです」
家の周りには田んぼの灌漑用水かんがいが張り巡らされ、水路に網を突っ込んで「ガサガサ」するだけで、面白いように魚やザリガニが引つかかる。小さい時から詩織はこうした遊びが大好きだった。

川崎家の水槽には、詩織がとってきた魚やザリガニが飼育されている。大好きな川遊びは原発事故後も、こっそりであつても続いていた。20日には父と一緒に、詩織は家の庭で芝生の種を蒔まいた。

「お父さんが地震で会社が休みになつて暇だから、芝生でも植えようって。娘も喜んで土いじりを手伝った。まさか、こっちへ放射能が来てるなんて思いもしないし、避難の指示もない

し。今となればもう、笑うしかないですが」

3月20日といえは、放射性ヨウ素も高かった時期だ。

新学期が始まり、子どもたちは小学5年生と4年生になった。

「伊達市の広報は逐一、読んでいました。市長が何も心配ない、大丈夫と書いていたし、その通りだと思っていました。疑うなんて、そんな気持ちは一切ないですよ。市が言ってることは正しいって。それよりも、あの頃は父のことが心配でたまりませんでした」

4月下旬、健太のクラスメイトが3人、避難を決めた。健太がお別れの手紙を書くとき悲しそうな顔で母に伝えた、その時。

「あの時、なんでかわからないのですが、私、息子と娘に泣いて謝ったんです。『ごめんね、うちは今、避難できない』って。他の家では避難を考えることができていたのに、あたしには全然、できなかつたっていうことが……」

あの時、溢れ出た涙は何だったのか。

原発のことは、気になつていないと言えは嘘になる。しかしあの時、どこかへ逃げようなんていう考えはまかつたくなかつた。

なのに、健太の身近にいる友達は、すなわちその親は「避難」という重大な決断を現にしたら。ひとえに子どもを守るためだ。それ以外の理由があるはずもない。そこまでの差し迫った状況にここは今、なつていゝのだらうか。真理には何もわからない。

ただただ、転校する友達に手紙を書いている健太の姿がたまらなく不憫ふびんだった。

私は逃げるといふことも考えられない親なんだ……、そこに思い至つた瞬間、涙となつた。

「健太、ごめんね。詩織、ごめんね」

謝罪の言葉が口をついて出た。嘘偽りない思いだった。

ほどなく父が亡くなり、事態の急展開に真理は巻き込まれていく。ひとり残された母が急速に弱っていく。不安定になっていく母の心を、娘として支えるだけでも必死だった。

真理にとっての2011年は、刻一刻と変わる家族の状況に対応するだけで精一杯だった。だから放射能のこと、被曝から子どもをどう守るか……、それは二の次、三の次のことだった。

だって伊達市が大丈夫だと言っているのだから、大丈夫に決まっているし、ガラスバッジも訳がわからないがつけているし、ホールボディカウンター（WBC）検査も伊達市はやってくれているし。だから、心配はないのだと。

真理に、甘くない「現実」が突きつけられるのは翌年、甲状腺検査が始まってからのことだ。それはわが子の「死」がちらつくほどの、過酷で理不尽な現実だった。

第1部
分断

2011年6月6日、午前10時35分、枝野官房長官室。

出席者 枝野官房長官、福山官房副長官、伊藤危機管理監、菅原局長、

西本技総審、森口文部科学審議官他。

「伊達市と南相馬市の線量の高い地域についての議論（メモ）」抜粋。

（福山副長官）無理矢理計画的避難区域にすることが必要ではないと思うが、面でないの
で経過観察とした。点で本人の希望を聞くか、避難してほしいというメッセージを出す必
要があるのでは。何で居て良いかと聞かれて答えようがない。

伊達の場合は小学校がある。

（森口文科審）伊達の小国小学校は表土を削った。

（枝野長官、福山副長官）出て行ってもらった良い、強制はしない、安全サイドに立って。

（伊藤危機管理監）自主避難ということか。

(枝野長官) 計画的避難区域の外。

(菅原局長) 区域と言うより概念的なもの。

(伊藤危機管理監) 区域の避難ではなく、個別の避難。

(枝野長官) 政府としては、安全の観点では20ミリシーベルト前後なので大丈夫だが、安心の観点で情報提供をして避難を希望する方には避難していただく、というラインでどうか。

(福山副長官) 伊達の小学校は開けておいて良いのだろうか。

(枝野長官) 子供の避難は強く促す。学校は除染して、学校の周りが低ければ良いし、周りが高ければ避難を促す。20ミリシーベルトの境目は柔軟に対応する。

1 見えない恐怖

激震は、まず小国を襲った。

始まりは、降ってわいたように小国にマスコミが大挙して押し寄せたことからか、それとも一枚のファックスが伊達市に送られてきたことか。

2011年6月3日、文部科学省からのファックスが伊達市に届いた。この日、文科省は放射線分布マップを公表したが、その結果、伊達市内で年間線量が20ミリシーベルトを超える地域があることが明らかとなったのだ。

24年3月11日までの推計値

宝司沢^{ほうしざわ} 20・0ミリシーベルト／時

石田 20・1ミリシーベルト／時

上小国 20・8ミリシーベルト／時

下小国 19・8ミリシーベルト／時

このなかで霊山町石田宝司沢地区はすでに、5月中旬段階で国より「計画的避難区域に該当する地域」と伝えられており、伊達市では「自主避難」という形で希望者のみ避難させる、すなわち「地域の実情に応じた対策がベター」だという判断を下した。

これが、伊達市がのちに積極的に採用した「特定避難勧奨地点」の原型となった。文科省からの通知を受け取った市長の反応に、深刻さはどうかがえない。少なからぬ市民がテレビニュースで、市長のこのようなコメントを記憶している。

「たまたまでしょう。急に（線量が）上がるのはおかしい」
報道機関はすぐに、問題の大きさを察知した。その焦点となったのが、小国地区だ。

冒頭に記した会合で福山官房副長官が、「伊達の場合は小学校がある」と言及しているのは、小国小学校を指していた。

小国の住民にとってみれば、飯舘村の全村避難の狂騒が一段落し、やれやれと思っていた直後だった。飯舘村の人々への同情はあったものの、他人事ではしかなかった「避難」が、自分たちにも降りかかってくるとは青天の霹靂^{へきれき}だった。

普段は歩く人もまばらな山あいの里に何台ものタクシーが停まり、カメラマンと記者らしき人間がマイクをもって、口を開く住民を求めて歩き回る。小国小学校の校門前には報道の人だかりができ、その中を子どもたちがカメラや視線に怯えながら登下校する。

一変してしまった小国の風景に、住民の誰ひとりとして普通でいられるわけがない。椎名敦子は、目の前の光景を前にただ立ち尽くす。

「こんなに取材のタクシーが張っているほど、有名な場所だったんだ、小国って……」
一体、何が起きているのか。全てが住民不在で進んでいた。

今回も「事実」を知らされたのは、市からでも国からでもなく新聞報道だった。6月4日、土曜日の朝に配達された福島民報の1面トップに「新たに4地点20ミリシーベルト超」の見出しが踊る。1年間の推計値が20ミリシーベルトを超えるという「地点」に、紛れもなく「小国」という文字があった。

「上小国20・8、下小国19・8……」

えー、何これ……。敦子は絶句するしかなかった。こんなもの、私たちが、誰も知らない。年間積算線量なんて、誰も教えてくれなかった。

外には朝早くから、タクシーが次々に詰めかける。

「こんなちっちゃな小国に、タクシーばかり停まっている。なんでこんなにタクシーがいるのか、ああ、本当に気持ちが悪い」

上小国に住む、高橋佐枝子も信じられない思いで、マスコミの大群を眺めていた。敦子と同

じように、6月4日の新聞で自分たちが暮らすこの場所が、とんでもなく放射線量が高いことを、「事実」として初めて突きつけられた。

「それまでも、高いらしいというのはあったんだけど、ほんとかどうかなんてしんにがら（知らないから）。だから優斗は自転車で、霊山中学校まで通わせていたの。伊達市の広報誌でも大丈夫だと言ってるし、予定通りに学校も始まったから。本人も、みんなと一緒にしたいって言うし」

この日は土曜。月曜から佐枝子は次男・優斗を車で中学校まで送り迎えすることにした。徒歩2分ほどで霊山町中心部へ行く路線バスの停留所もあるが、そこまで歩かせることも不安だった。幸いなことに上の2人の高校生は、福島まで通学する交通手段がないために夫の徹郎が出勤の際、阿武隈急行の保原駅まで送り、帰りは佐枝子が駅まで迎えに行っていた。ゆえに高3の直樹と高1の彩に関しては、放射線量が高い場所を歩かせてはいない。

しかし、優斗は無防備とっていい状態で高線量地域を朝夕、自転車で走り抜け、くわえてテニス部に入ったために放課後は毎日、砂埃舞^{すなぼこり}う校庭で部活をしていた。

霊山中の空間線量（6月1日～6月7日）は、伊達市の発表によれば1・70～1・90マイクログローベルト／時。

「最初はそれでも部活は、屋内でやってたんだよ。廊下でボールを打ったり。でも割と早いうちに、外でするようになった」

文科省が校庭使用基準を3・8マイクログローベルト／時以下としたことにより、4月19日、県教委は「学校の校舎・校庭等の利用判断における暫定的考え方」を発表。これを受けて伊達

市では富成小学校、小国小学校、富成幼稚園以外の学校では、屋外活動をして問題ないと思われた。

優斗が通う霊山中学校でも、校庭での体育や部活が再開された。佐枝子はどうしても心配で何度か、学校に電話をしている。

「校庭を除染したのは8月だから、除染してない校庭で、ずっと部活をやってたんだよ。あのころ、居ても立ってもいられず、しつこく学校に電話をかけた。何度聞いても、校長先生は大丈夫だって。通学はマスクをさせていたけど、部活ではマスクは取るの。邪魔だからって。校長は伊達町に住んでいて、『伊達より、霊山の方が低いから大丈夫だ』って、そればかり」のちに伊達市は除染に際し、線量によって市内を3つのエリアに分けるのだが、校長が住んでいた伊達町は最も線量の低いCエリア、霊山中学校がある霊山町中心部は小国同様、最も線量が高いAエリアとされた。中学生を守ろうという意識が、果たして学校長にどれだけあったのか。

現に優斗は除染していない校庭だけでなく、ボールが転がれば側溝のある草むらへボール拾いに入っていくのが、常だった。佐枝子は大きく首を振る。

「霊山中の生徒への配慮は、ジャージ登校だけ。ジャージなら洗えるからって。それだけ」霊山中は事故直後の2011年3月の春休み期間中も、外で野球などの部活をやらせていたという証言がある。原発事故後、伊達市で際立つのは中高生が守られていないという事実だった。

佐枝子は子どもたちが心配だからこそ、玄関からエントランスなど、子どもが通る場所はと

にかく水で流すようにしていた。これが、のちに特定避難勧奨地点の設定にあたり、仇となつてしまふのだが……。

「こっちは子どもが心配でしようがないから、毎日、玄関には水をかけてたの。テレビで言ってることは、全部やってたの。通り道は水で流して、外から帰ってきたら、服を脱がせてビニールにいれてすぐに洗濯する。窓も夏場の暑くなるギリギリまで閉めていたの。冷房もしないで、とにかく外気を入れられない生活。暑くなって、どうしようもなくなって開けたんだけど」
噂で、この辺の線量が高いらしいということが聞こえてきたのはいつだったか。隣の飯舘村が全村避難になった頃からか。

「『ほだ（そんな）に、ここ、あぶねかったの？』って。何にも知らなかった。飯舘村や川俣は高いって聞いてからは、ここも近いから高いのかと思っただけど、小国のどこが高いのかは、わがんねかったし」

佐枝子は唇を噛む。

「はつきり危ないってわかったのは、勧奨地点の話が出て、タクシーがうじやうじやいるようになってから。新聞にも出てたし。後でわがったんだけど、優斗の通学路はホットスポットだった。すごく高いところを毎日、自転車で通ってたんだよね……」

「この辺、もう空白」

早瀬道子は新学期がスタートし、勧奨地点の話が出るまでの期間をこう話す。

「なんかもう、生きるのに一生懸命で何も覚えていない」

長男の龍哉は徒歩で、小国小まで通っていた。小学2年生の足で25分ほどの距離だ。

「うちの通学班は、お母さんたちみんな働いていて、交代であつても子どもたちを車で送迎することは難しかった。みんな心配だけど、どうしようもなかった」

いくらマスクをさせても、小学2年生の子だ。暑かったり苦しければ、すぐに外してしまふ。

「すごく心配だった。歩かせていいのだろうかと思ひながらいて、ただ家では手洗い、うがいをきっちりさせて、外で遊ばせないなど、家でできることはしていたんです」
勤務する幼稚園と同じ敷地にある小学校に、幼稚園児の検診で出向いた時のこと。道子は目をみはった。

「昇降口にゼオライトと雑巾が用意してあつて、窓という窓は全部、目張りをしている。換気扇もそう。『すごい、なに、この学校？』つてびっくり。なんでもアメリカ人の先生がいて、放射能に詳しいからやれたつて。校庭や子どもが通る場所で線量の高いところには、気をつけるようにとテープで指示されてあつて、4月初めからちゃんと子どもを守る対策がされていた」

だから小国小にも、この取り組みを伝えた。校長は翌日には玄関に雑巾を用意するなど、素早い対応をとってくれた。

「当時の校長先生は、親の要望や心配に寄り添ってくれる人だった。ちゃんと親たちの話を聞いてくれたし」

5月の連休明け、小国の線量が高いようだと通学班の班長から電話が入る。

「うちの班だけ、車で送り迎えをしていないから、仕事を抜けてでも協力して、子どももの送り迎えをするようにしようっていう班長の申し出があつて、その通りだ、そうしようと親たちみんなまで協力してやることにしたんです」

もはや、子どもを歩かせることすらできない。このような場所で、事故後も「普通」の生活を営まざるを得ない状況が強いられていた。

子どもを車で送迎するという、この決断は実に正しかった。のちに特定避難勧奨地点が設定された際、道子たちの通学班がある山下行行政区は、ほとんどの家が「地点」に指定された。それほど高線量のエリアだったのだ。

5月中旬、道子は待ちに待った線量計を手にした。数時間という枠であっても、ようやく知人から線量計を借りることができたのだ。ここで初めて、自宅内外の放射線量を測定したのだが、その数字を記した「2011年5月」のカレンダーは四つに折りたたまれ、今も資料の中に大切に保管されてある。カレンダーの裏に殴り書きのように記された文字に、道子の逡巡や驚愕などさまざまな感情が読み取れる。

台所 0・75 たたみ 0・69 玄関 0・96 子ども部屋 0・38 2階 0・56 テラス 1・36 下の寝室 0・20 〓 0・17 ぶらんこ 1・92 クッキー 4・13 駐車場 3・81 牧草地 4・0 〓 3・8 玄関前畑 2・8 〓 2・74 ばあちゃん自転車 2・3 アイビー 5・0 〓 4・3 ア

「クッキー」と「アイビー」は、外で飼っていた犬の名前だ。

「家の中でも1近くあつて、外は5とか6とか。雨樋の下は6とか7とか。側溝は測定不能。」

なんでこんなに高いの？ と目を疑って、もう1回、別の機械で測って、それでも同じ。これが現実だった」

道子は確信した。

「犬の背中で、5あるって。こんなところに一刻も子どもを置いておけない」

小国に全国のマスコミが押し寄せたのは、その直後のことだった。小国にとって避難というものが現実味を帯びてきた。

「お父さんは、『避難になったら、すぐに出るからな』って。私も職場に、避難になったら辞めさせてもらうしかないと話をして。そういう覚悟でした」

仕事を辞めることに未練がないと言ったら嘘になる。ただ仕事を続けながら、子どもたちを守ることは不可能だともわかっていた。後悔の念はない決断だった。

いつだったか覚えていないが、道子はテレビのニュース番組をたまたま見ていた。アナウンサーはこう話していた。

「飯舘村と同じ計画的避難区域にという話を、伊達市が断った」

2 子どもを逃がさない

小国が「避難」を考えなければならぬほどの線量があると明らかになる前から、敦子の闘いは始まっていた。

「子どもを守れることは、とにかくすべてやりたい、ただただ、その一心でした。農林水産省

に土壤調査をしてほしいと電話をしたり、民主党の玄葉（光一郎）さんにメールを書いたり、手当たり次第に動きまわりました。市に『小国の線量を測って、測定値をきちんと出してほしい』というお願いもしました」

とにかく何が何でも、藁にでもすがりたい思いだった。

伊達市では4月5日発行の「だて市政だより」3号以降、市内各地の線量を公表するようにはなった。しかし、敦子は頭を振る。そんなことではないのだ。

「市は、集会所の線量しか教えてくれない。あたしたちは集会所に住んでいるわけじゃないんです。家や学校とか、子どもが暮らす身近なところの線量が知りたいのに……」

やがて、飯舘村の全村避難の話が重大ニュースとなって駆け巡る。しかし、すぐ隣の小国は何事もなかったように、「普通」の生活が続くだけ。これは何か、シユールなお芝居なのか？ 敦子には現実のものとは思えない。

「新聞で小国小が一番高いって報道されているのに、なんで市も学校も何もしないの？ なんで説明会もないの？ 飯舘村が避難になるっていうのに、なんで、小国には何もないの？ 絶対、ここだって同じじゃん」

なぜ、小国には救いの手が差し伸べられないのか。そのことだけでも知りたい一心で、地元紙に電話をした。

「あたしたち、新聞の線量を見て、自分たちが置かれている状況を考えているんです。ここだって、飯舘村とそんなに変わらない。なのに、なんで同じ線量なのに飯舘村は避難できて、小国は避難指定にならないのですか？」

対応したのは記者らしき男性だった。

「飯舘村は、本当に高い場所があるんです」

えっ？ どういうことだろう。敦子は聞いた。

「じゃあ、なんで本当のことを書かないのですか？」

記者は、こともなげに言った。

「だって、ほんとのことを書いたら、怖いでしょ？」

受話器を持つ手が震えた。確かに新聞社はそう言った。天と地がひっくり返るような思い。

「新聞って、ほんとのことを書かないの？ まさか、そんなことがあるなんて……。今まで新聞もテレビも信じていたけど、信じちゃいけないんだ……。世の中、そんなことになってるの？」

それでもまだ、嘘であってほしいと心のどこかで敦子は念じていた。

4月17日には、県の放射線健康管理アドバイザー、山下俊一が伊達市で講演会を開いている。テーマは、「福島原発事故の放射線健康リスクについて」。

「1000ミリシーベルト以下なので大丈夫。50ミリシーベルトを超えても、がんになる確率はほぼゼロ。10マイクロシーベルト以下なら子どもの外出もオッケー。遊んでも問題ない……」

敦子は周囲で盛んに行われていることの意味がわからない。小国小で行われた子どもと保護者に対しての放射能の学習会もそうだった。女性講師が話すのは、自然放射能のことだ。

「お花にも放射線があつてね、飛行機にもあるしね、レントゲンにもあるよって……」
違う、違う……。たまらなくなつた敦子は手を挙げた。私たちの本当の思いを聞いてほし

い、それがどれだけ切実なのかを。

「私たちは、自然放射線のことを心配しているのではないんです。人工的に作られた放射線が現実に降り注いだ結果、それが子どもにどう影響するのかを聞きたいんです。だから、この会に参加したんです」

敦子の切なる訴えに、女性講師は泣き出した。

「お母さんの気持ちはわかります。でも私たちは、これ以上は言えないんです」

一体、何が起きているの？　なぜ、誰も子どもを守ろうとしないの？

敦子は今、冷静に振り返る。

「どんな説明会も一緒でした。たばことかポテトチップとかに、問題がすり替えられる。そんなのみんな一緒でしょ？　どこに住んだって。私が知りたいのはここに住むにあたって、どうやって子どもを守るかなんです。今、ここで、生きていくしかないのだから」

4月19日、文科省が発表した「校舎・校庭等の利用判断における暫定的考え方」において、屋外活動制限に該当する13校のひとつに小国小が入った。

これを受けて、4月22日、保原市民センターにおいて小国小の保護者・職員、同じく該当校となった富成小の保護者・職員、教育委員会担当者を対象に、文科省による説明会が開催された。

国の人間と話せる貴重な機会に、敦子は頭に浮かぶかぎり質問をした。聞きたいことは山ほどたまっていった。

「通学路は大丈夫ですか？　洗濯物を外に干しているのですか？　畑の野菜を食べていいので

すか？」

答えは、実にあっさりしたものだ。たつた。

「管轄外だからわかりません、次回に持ち返ります」

こう言われて二度と、持って返ってもらったことはない。夫の亭からは「おまえはバカか、管轄外のことなんか、話すわけがない」と言われたけれど、敦子が聞きたいのはそこだつた。

聞きたい情報は何も聞けず、どこに訴えてもまともに話を聞いてもらえない。この堂々巡りは、敦子を消耗させていく。

ゴールデンウィークに入つてすぐ、伊達市は小国小学校の表土を剥ぐという形で、表土除去を行つた。同時期に、保原町にある富成小学校と富成幼稚園の表土除去工事も行つてゐる。

表土除去の結果、小国小では1センチメートルの高さで6・76マイクロシーベルト／時あつた線量が0・79に、富成小では同5・42マイクロシーベルト／時が0・61になつたと「だて市政だより」8号で報告された。

除去した表土は校庭の一部に仮置きし、この作業の結果、小国小、富成小、富成幼稚園ともに、屋外活動ができるようになった。

敦子には順序が逆だと思えない。この作業つて、子どもたちを守るためにやつたことなの？ まず安全な場所に逃がすことじゃないの？ 拭つても拭つてもぬぐえない、伊達市への違和感がどんどん大きくなつていく。

「市長はどこよりも先に、小国小をきれいにしてやつたつて言う。コンクリートも除染したし、いろいろやつたのにつて。それで何が不満なの？ つて。あたし、これ以上、文句言わせ

ないよという雰囲気ですごく感じた」

本来なされるべきことは一刻も早く、汚染のない場所に子どもを移すことなのに。

除染が口封じの策とされてしまうことに耐え切れず、敦子は教育委員長に直接訴えた。

「私たちが求めているのは、校庭をきれいにするのではなく、表土除去は大事かもしれないけれど、そんなことをしなければならぬ場所、子どもたちが生活するのが嫌なんです。全校生徒57人の小さな学校です。小国小全員を、違う場所に移してほしい。集団疎開っていうのが、昔はあったのですから」

敦子の切なる願いはまたも空中で瓦解がかいする。

「伊達市の方針が不満なら、伊達市を諦めてほしい。市として、子どもを移動させることは考えていない」

放射能のないところで子どもたちを生活させたいという、親として当たり前前の望みに対し、伊達市は聞く耳を持たないどころか、出ていけと言う。なぜ、当たり前前あたり前のことが通らないのか、動けば動くほど訳がわからないものにぶち当たる。敦子が願うのはただ一つ。

「マスクなんかしなくてよくて、ソフトボールをやめなくてもよくて、砂遊びもできるような、そういう環境に、子どもを連れて行ってあげたい。それだけなんです」

長男の一希には夢中になっていたソフトボールを、泣く泣く諦めさせた。子どもの望みを断つという、身を切るようなつらさを市長にもわかってほしかった。

子どもを守りたいという、親としての切なる思いはどこにも届かない。

「わたし、怖かった。わからないものに包まれてすごく不安で。ただちに影響はないとしか言われぬ。じゃあ、普通に生活していて、何かあった時に、誰か責任をとってくれるの？ わたし、誰もとってくれないって、わかったんです。そういうのが一番、怖かった」

かけがえのない自分の子どもが、傷つけられることを想像しただけで、到底、尋常な精神でなどいられない。

「万が一、子どもに何かあったら、あたしは大丈夫なのかって考えました。あたし、自分をものすごく責めると思う。平気でなんていらぬ。あとあとになって後悔したくない、それだけなんです。そのためだけにできるだけのことをしたい、それしかできないから」

5月末、伊達市は次々に子どもへの対策を発表した。26日、「だて市政だより」（5月26日発行）で市長が「市内全小中学校、幼稚園、保育園の表土剥離、プールの清掃除染」を、30日には市長会見で「教育施設にエアコン設置、子どもの放射線対策10億円を専決決済」と発表。

市長は紙面で、こう訴える。

「放射能の健康被害の恐れと外で遊べないことによるストレスを心身の健康という観点から考えた時、私は後者の心配が大きいのではないかと考えておりますので」

市長が「子どものため」と進めていく方策への、敦子の違和感はますます大きくなる。「意見を聞いてくれないだけじゃなく、頼んでもいないことをやる。除染は大事かもしれぬ

けど、順番が違う。まず子どもたちを避難させてから除染して、きれいにしてから子どもを戻してほしい。エアコンを設置した、除染したから文句は言わせないって、すごく卑怯なやり方だと思いました」

敦子の怒りは真つ当だ。これらの施策は、「子どもを守る」ためではなく、「子どもを伊達市から逃がさない」ためのものだ。

「逃がさない」どころか、伊達市は子どもも放射能と「闘わせる」戦闘員として位置付けた。誰のために？ 農業従事者のためだ。

6月16日発行「だて市政だより」14号の市長メッセージのタイトルは、「学校給食用食材における地産地消について」という、目を疑うものだった。

市長は放射能の影響による食材の「地産地消」の見直しについて、市民に語りかける。

「農業生産者は、放射能の風評被害により大きな痛手を負いつつあり、そうした中で、安全・安心な農作物を栽培し提供しようと全力を傾けているところです。

そうした中で、伊達市民が福島県の農業生産者の作る作物を信用できなくなれば、他県民が信用できるはずはないのではないのでしょうか。風評被害に苦しむ生産者に対する思いも共有していかなければならないと思います。(中略)

子どもたちには、このような社会の仕組みや放射線についての正しい知識などの学習を行い、地元の食品で規制値に合格した新鮮な食材の提供について、さらなる安全確保に努めながら進めてまいります」

この時期の食品の出荷制限基準は、現在の5倍の500ベクレル/kgだ。放射能が降り注いで3ヶ月経ったか経たないかで、農家のために「子ども」も放射能と闘えと言っている。敦子は学校が始まってからずっと、給食と牛乳を止め、できるだけ西日本の食材を使った弁当を作り続けてきた。

自宅でも地元の食材を使ったものは、祖父母世代だけが食べるようになっていた。夫の母に被曝の不安への理解があったことも大きかった。ひとつの食卓に並ぶのは二つの炊飯器で炊いたそれぞれのごはん、2種類の副菜。当時、これは椎名家に限ったことではなく、伊達の多くの家で行っていたことだ。

四方八方、不安だらけの日常にあって、敦子が不安を解消できる唯一の方法が、自分で食材を選んで、子どもに弁当を作ることだった。それだけがもやもやと鬱屈した閉塞感を解消してくれる、たったひとつの手段。

もちろん、敦子は知っている。友達と同じ給食を食べられない子どもが卑屈になってしまう気持ちを、そのことの異常さを。これは、長く続けるべきでないことも。

それでもたったひとつの、子どもを守るために母としてできることだった。「本来なら『地産地消』っていい言葉だったのに、もう、とても恐ろしい言葉になってしまった。農業が大事なのはわかるけど、私は健康が第一だと思う。健康な子どもがいての、伊達市の未来だと思っから」

四面楚歌しめんそかのなか、敦子はずっと念じていた。私は母として子どもに胸を張っていたい。それ

は夫の亨も同じだった。

「お父さんとお母さんは、あなたたちを守るためにちゃんとやってきたよ」
子どもにそう言えるように、ただひたすらやれることをやっていく。そんな敦子に、こんな
レツテルが貼られ始める。

「気にしすぎる親、心配しすぎるの親」

3 特定避難勧奨地点

伊達市長、仁志田昇司^{にしだしょうじ}。中肉中背、短く撫^なで付けた黒髪、太い眉とぎよろりとした眼が、押し出しの強い印象を発する。

昭和19年8月7日、伊達市保原町生まれ。昭和44年、東京大学工学部精密機械科卒業。

卒業後は日本国有鉄道に入社、そのままJR東日本へ。JR東日本仙台車両所長から、同レ
ンタリース株式会社取締役社長に就任。JR東日本本社での出世の王道から外れた子会社の社
長時代に、保原町長出馬の声がかかり、平成13年に保原町長に当選・就任。

保原町長を2期勤め、平成18年2月、旧5町が合併してできた伊達市の市長に当選・就任。
平成26年2月、3期目の当選を果たし、現在に至っている。

6月9日、伊達市に国からの来客があった。原子力災害現地対策本部・原子力被災者生活支
援チームの佐藤暁室長が来庁し、直接、国が新たな避難制度である「選択的避難」を検討して

いることが伝えられた。

安全性の観点から政府として一律に避難を指示するべき状況ではないために、「選択的避難地点」として特定するという。

当面、伊達市と南相馬市に、該当地域があると判断された。市の意向を打診された仁志田市長は、こう答えている。

「飯舘村のように計画的避難区域ではなく、個別指定で行っていただきたい」
個別指定——実は伊達はすでに、市独自のモデルをすでに持っていた。それが、霊山町石田宝司沢地区の個別指定だ。石田地区に年間20ミリシーベルト超の場所があることを国から伝えられたのは、飯舘村が全村避難で大騒ぎとなっていた頃だった。

仁志田市長は地域まるごとを飯舘村と同じような計画的避難区域にするのではなく、避難を希望する世帯のみを対象として、市営住宅を用意し、原発事故避難者と同じ扱いで個別に避難させた。この「実績」の上に、今回は対象地域が広いものの、最初からこの個別方式で対応するつもりだったようだ。

一方、当事者である小国住民に初めて、市による「住民説明会」が開かれたのはこの翌日、6月10日のことだ。

市長はその前に、国に「個別指定でお願いしたい」と市の結論をすでに伝えている。住民の意向を未だ、一度も聞いてさえいないのに。

「特定避難勧奨地点」に係る協議経過」

平成23年6月9日（木）、15時30分

（伊達市）

6/12開催予定の霊山地域説明会打合せにおいて、原子力災害現地対策本部・原子力被災者生活支援チーム佐藤室長より新たな避難勧奨制度「選択的避難」を検討していることを伝えられた。

市の方針としては、これまでの法的強制力を持つ「計画的避難区域」の指定は望まず、住民自らが避難するかしないかの選択が可能な、緩やかな制度設計をお願いした。

また、これまでの国の公表データについては、市の測定と若干の相違が見られるため、11日、12日、13日の詳細モニタリング調査の結果を受けて慎重に判断頂くよう伝えた。

「年間20ミリシーベルト超線量地点への対応について（案）」

平成23年6月10日

原子力被災者生活支援チーム

（中略）

5、これまでの関係者の反応

(1) 現地対策本部 田嶋本部長

- ・ 地域を限定的に決めることは重要。
- ・ 住民の判断に任せ、自主的に避難させる名称は反対。国の関与を示すべき。
- ・ 風評被害などを恐れて地域の設定をしないのではなく、客観的データに基づいて指定するしかない。

(2) 福島県 森合局長（避難担当）

- ・ 限定的な地点の問題であることから、一律の避難ではなく避難の勧奨といった意味合いを明確にしてほしい。
- ・ できるだけ確実に補償を受けるためにも地域を設定することは理解。
- ・ 一戸ずつ指定するより地域で設定する方が混乱は少ない。
- ・ 乳幼児や妊婦はできるだけ避難した方が良いという理解。
- ・ 来週月曜（13日）に県議会の災害対策特別委員会が予定されているので、発表時期については配慮して欲しい。

(3) 南相馬市 桜井市長

- ・ 一律の避難など大げさな対応ではなく、該当する区域を個別に訪問して説明する対応とすべき。
- ・ 一方で、国として地域の特定をしてほしい。
- ・ 高齢者などは避難しなくてもよいようにしてほしい。

(4)伊達市 仁志田市長ほか

・計画的避難区域のような国による一方的な強制力がない本地域の設定については受入れ可能。

・ただし、地域の設定にあたっては、詳細なモニタリング結果を踏まえて慎重に対応して欲しいので、地域の設定の考え方を先に公表していただき、エリアの設定については、モニタリングを詳細に行った上で時間をかけて行ってほしい。

・年間積算予測が20ミリシーベルトを少しでも下回ると、対象外にすると、隣同士で争いになるので注意が必要。

・汚染を減らす取り組みは、国も積極的な対応を期待。

・避難希望が多い場合には、小学校のグラウンドに仮設住宅を建てることも考えないといけない。

小国地区の母親たちの間に、激震が走る。こんなに線量が高いところに、子どもを置いていいの？ 動揺がどんどん広がっていく。しかし、市からは何ひとつきちんとした情報は伝えられない。

椎名敦子が「地域でなく、個別の避難らしい」と知ったのは、NHKの記者の取材を受けた時だ。敦子は頭を振る。そうではない、当初から求めているのは子ども全員の避難だ。

「私たちはとにかく、小国小学校を学校まるごと疎開させてほしいかったです。全校児童57人の小さな小学校。子どもを全員、助けてほしい、避難させてほしい」

母親たちが声をあげて行く中、地域で軋轢あつれきも生まれてきた。母親たちの多くは「嫁」という立場だ。義父母から「嫁のくせに騒ぐな」と釘を刺されるばかりか、地元のJA（農業協同組合）からも陰に陽に圧力がかかる。

「騒ぐと、それだけ風評被害が増える」

こんな時だ。初めての住民説明会が開かれたのは。6月10日、市長自ら出向き、住民に何が起きているのかを説明するという。

場所は、上小国にある「小国ふれあいセンター」。

しかし、この説明会に敦子たち小国小PTAの参加が許されることはなかった。参加者を上小国と下小国の区民会長と副会長、行政区長と班長などに限定した、クローズの会として設定されたのだ。行政区長は地域の代表者、班長も主に年配者が担うのが恒例だ。高齢者だけの集まりで、子育て世代は一切参加が認められないものとなった。

敦子はなんとか、この会への参加を熱望した。子をもつ母の声を市長に届けたい。国にも聞いてもらいたい。制度が決まってしまう前に何としても。

地元の霊山支所に訴えたところ、保原町にある本庁でないとわからないという。そこで敦子は友人と一緒に本庁に電話をして正式に、住民説明会への出席の許可を求めた。しかし、市から返ってきたのは無機質な答えだ。

「今回は区長と班長だけの集まりなので、お母さん方の参加は無理です。不満を聞く場は後日、開くようにしますから」

しかし、そのような場はついに持たれることがなかったと言っている。唯一、クローズでは

なく「下小国・上小国地区の住民の皆さんへ」という、全住民へ開かれた会が持たれたのは、6月28日。モニタリングもとつくに終わり、2日後には避難対象となる「地点」が発表されるという、すべてが決まった後だった。

6月10日、午後7時30分、小国ふれあいセンターにおいて、「東京電力福島第一原発事故に関する伊達市による説明会」が開催された。

住民側出席者は、上小国、下小国行政区長、班長。上小国、下小国区民会長・副会長。

市執行部の出席者は仁志田市長、しぎはら嶋原貞男副市長、佐藤孝之市民生活部長、佐藤芳明産業部長。進行は、かんの菅野正俊靈山総合支所長。

市民生活部長の概況説明の後、市長は対応方針をこう説明した。

国から靈山町が3ヶ所、年間積算線量推定値が20ミリシーベルトを超える地域だと、指摘された。先に石田宝司沢が20ミリシーベルトを超えると発表されたが、計画的避難区域にはしないと国から言われたので、市独自で、計画的避難区域に準じた扱いにして行こうと考えた。

石田宝司沢での経験が、伊達市の「原型」となっていた。

市長は全員が村を離れることになった飯舘村を引き合いに出し、「ここでの生活を望む人、ここでしか生計を営めない人も多数いる」とした上で、市の「方針」を明示した。

伊達市としては、国から計画的避難区域の指定の打診があっても断り、みなさんのいろんな事情をお聞きしながら市として出来る限りの事をしていきたい。みなさんの中には国の指定を求めるお考えもあるかもしれませんが、市としましては、国と同じようにやっていく考えでありますので、上小国地区に対しては、石田坂ノ上地区と同じく、自主避難の支援（市営住宅への入居、日赤からの家電6点セットなど）をしていくつもりである。

説明会を行い、住民の意見を聞いて対応を考えるとという段取りではなく、すでに出ている市の結論を当該住民の代表に向けて明らかにした会だった。

市長の説明を受けて、意見交換が始まる。

住民のトップバッターとなったのは、上小国区民会長の菅野康男だ。

Q（上小国 菅野康男さん）（中略）やはり、自主的避難というか、石田地区のような形でやってもらえば、我々としても安心できる。学校については、校庭の表土を剥いだが、学校の周辺を除染しないと心配である。

A（市長）やはり全員が強制的避難をしなくてはというのは、いろんな事情を抱えているわけで、本当に困る。それぞれの事情に応じて、計画的避難区域と同じような対応をしていきたい。その意味では、ご賛同いただいております。

最初からまるで「シヤンシヤン」、お手盛り会の様相を呈する流れだった。市長は質問に応える形で、「除染」についてとくとくと続ける。

結果としては、伊達市内全部を除染していくことが必要である。放射能レベルを下げなくては、避難している人たちも戻ってくることができない。セシウムの半減期、放射能が半分になるのは、30年。ほぼゼロになるのは、300年後。伊達市としては、しかるべき専門の先生の助言をうけながら、除染に取り組むことを目指している。

専門の先生とは、現在の原子力規制委員会委員長しゅんいちの田中俊一で、この時点ですでに伊達市中枢部に入り込んでいた。除染についての詳細はのちに譲るが、市長の除染への鼻息が相当に荒いことが、避難を巡る説明会であつてもうかがえる。

説明会はすでに、その役割を終えたのも同然だった。これで住民は市の考えを受け入れ、市は住民の同意を得たことになった。

元霊山町議であり、伊達市になってからも市議を務め、地元住民からの信頼が厚い、大波栄之助（当時78歳）はこの流れに非常に驚いた。思わず、大波は声を上げた。

「なんですか？ 両区民会長、あんたら2人だけで決めたように聞こえっぺ。ふざけんな」大波は後にこう振り返る。

「おら、びっくらこいた。両区民会長、大賛成と言うから。『シヤンシヤン』になりそうで集まってんのは、年寄りばかりだがら」

議事録には、大波の発言が記録されている。

Q（上小国 大波栄之助さん）市の意向として、自主避難をさせたいといっているように聞こえるが、この説明会だけで、住民の了解を得たと、市長は判断するのか？

A（市長）この会だけで結論を出すといつたわけではない。今日、説明会ですから、市の方の考え方とみなさんの考え方を伺って、最終的に市としても決定したい。

Q（上小国 大波栄之助さん）今日の参加者をみると、小さい子どもや小中学生を持つ父兄がいないように見えます。子どもを持つ父兄が一番心配している。こういうことを決める場合は、若い方々の意向に十分注意してやっていただけないと困る。ぜひ、アンケートなどの地区の全員の意見を把握した上で、自主避難等をやっていたただきたい。

A（市長）アンケートで皆さんの意向を伺う。多数決で決めるのもやぶさかでない。

この会合には早瀬道子の夫、和彦も実は出席していた。山下行政区の班長だった彼は唯一、就学前の子を持つ親の参加者となった。会合から帰った和彦は、こう言った。

「アンケートを取ると市長は言ったからな。アンケートで、子どもを持つ親の気持ちもちゃんと聞くと」

高橋佐枝子の夫、徹郎もこの会に潜り込んでいた。

「市長も来ていて、『子どもさんがいる世帯は優先して指定しますから』っていうんで、『おらいは指定される』って、ほっとして帰ってきた。下は中学生だけど、あの時は小学生だったんだから。アンケートもやるって言うし」

しかし、このアンケートはついに一切、行われることはなかった。

翌6月11、12日に電気事業連合会が各戸を訪問、地点設定のためのモニタリングが行われた。測定箇所は玄関先と庭先の2地点を、50センチメートルと1メートルの高さで合計5回測定するというものだ。

原子力災害現地対策本部（放射線班）と福島県災害対策本部（原子力班）が6月10日付けで作成した「環境放射線モニタリング詳細調査（伊達市）実施要領」には、こんな記載がある。

「地点を選ぶ際は、くぼみ、建造物の近く、樹木の下や近く、建造物の雨だれの跡・側溝・水たまり、石塀近くの地点での測定は、なるべく避ける」

避難かそうでないか、住民の運命を左右する根拠となる測定が、「なるべく低い地点を選んで測っている」と住民に言われても仕方のないマニュアルで行われていた。しかも実施主体は、電事連。「そもそも電事連が測定では、泥棒が警察官をやるようなものだ」という声が上がってきたのも、自然な住民感情だった。

早瀬家の測定値は、庭先50センチで3・4マイクロシーベルト／時。

椎名家では、3マイクロシーベルト／時を超える地点は計測されなかった。小国の中でも比較的低いということは通学路を測定した時から、うつすらと敦子にはわかっていった。

問題は、上小国にある高橋家だ。この中島行政区にある寺、「小国禅寺」はとりわけ線量が高い場所だと、市で認識しているほどだ。

しかし高橋家の測定では、庭先50センチで2・8マイクロシーベルト／時。佐枝子は言う。「子どもが通るところは毎日、水を流してきれいにしてだの。それが仇になったんだよね。下が石だから、低くなるの。ちよつと離れば、4とかになる、そこらへん一帯。そこはなんぼ言っても、測ってもらわんにかつた」

翌年の11月、除染のために高橋家の敷地内の放射線量の測定が行われた際、雨樋の下、地表1センチで102マイクロシーベルト／時、50センチで7・8マイクロシーベルトという、信じられない数字が記録されている。長男が使っていた離れの子ども部屋の雨樋の下が、地表1センチで39マイクロシーベルト、50センチで4・6マイクロシーベルト、1メートルで2・27マイクロシーベルト。毎日、子どもが通る場所が、事故から1年8ヶ月経つてもこれほどの高線量を呈していた。

6月16日、官房長官が会見を行い、国は「特定避難勧奨地点」という新しい避難制度を発表した。

「特定」の「避難」を「勧奨」する「地点」。何というネーミングなのだろう。「特定の避難」？ 避難については「勧奨」に止^{とど}め、そしてその対象となる「地点」とは？

国の説明はなんともまどろっこしい。前提として強調されるのは、汚染は「面的」ではない
Ⅱ「限定的」であるということだ。

「当該地点に居住していても、仕事や用事などで家を離れる時間がある通常の生活形態であれば、年間20ミリシーベルトを超える懸念は少ない」

ゆえに、「計画的避難区域とは異なり、安全性の観点から、政府として区域全体に対して一律に避難を指示したり、産業活動に規制をかけたたりする状況ではない」と判断するものの、ただし一方で、「年間20ミリシーベルトを超える可能性も否定はできない」。

そのような「地点」を、「特定避難勧奨地点」とすることで、「近辺の住民の方々に対する注意喚起や情報の提供、避難の支援や促進を行う」、新たな制度だという。

この新たな避難制度の対象となったのは南相馬市原町区大原、伊達市霊山町石田、伊達市霊山町上小国（下小国含む）の3地点。

それにしてもわかりにくい。「地点」と「近辺の住民」とは、イコールではないのか。その関係はどうなるのか。「地点」にならなくても、地点の近辺の住民であれば、注意喚起や情報提供、避難の支援を受けられるのか？

実際、運用された実態は「地点」の住民と、「地点でない」住民とは、いくら近辺であつても、明確な線引きがなされ、地点でなければ注意喚起や情報提供も蚊帳の外、避難の支援も促進も全く受けられないという、地域共同体の暮らしをめちやくちやにするモノだった。

何より、「地点」かそうでないかの、指定の根拠が曖昧だった。「放射線量」で決まるにもか
かわらず、そのモニタリングは住民からの信頼を得る方法で行われたとは言い難い。

では、どんな状況ならば「地点」として特定されるのか。官房長官「国の説明はこうだ。

「雨樋の下や側溝など住居のごく一部の箇所の線量が高いからといって指定するのではな
く、除染や近づかないなどの対応では対処が容易ではない年間20ミリシーベルトを超える
地点を住居単位で特定する」

では玄関と庭先が3マイクロシーベルト／時以下の数値だった高橋家の場合はどうか。それ
以外のほとんどの敷地が3〜4マイクロシーベルトの線量を有するにもかかわらず、たった2
ヶ所の測定だけで「対処が容易」と判断されるということか。家の裏では8〜9マイクロシー
ベルトの線量があちこちにあるにもかかわらず。

繰り返すが「地点」かそうでないかを決定する測定が、敷地内のたった2ヶ所なのだ。

その法的根拠も、計画的避難区域が原子力災害対策特別措置法であるのに対し、「一律に避
難を求めるほどの危険性はなく」、注意喚起としての支援表明であるので、法律に基づく避難
等の指示ではないというのが政府の位置付けだ。なんともすっきりとしない曖昧さを残す。

すなわち避難してもしなくてもよくて、その土地で農業や酪農をしても一向に構わず、ただ
し「地点」に指定されれば計画的避難区域と同等のものが補償されるという。

この避難の枠組みでとりわけ強調されたのが、「妊婦や子どもがいる家庭の避難」だ。妊婦

は明確だが、では、「子ども」とは何歳までを指すのか。

しかし国の関与は、「自治体と相談していく」にとどまる。実際、同じ制度の適用を受けたにもかかわらず、伊達市と南相馬市は全く異なる基準のもと、「地点」設定を進めていくこととなる。

伊達市は「子ども」を小学生以下としたが、南相馬市は「18歳以下」とした。このことにより伊達市では、中高生は避難というセーフティネットから振り落とされ、ことごとく高線量地帯に取り残されることとなった。

4 届かぬ思い

椎名敦子の自宅前に、取材の順番待ちがほどなくできた。マイクを向けられた小国小の母親たちはみな、取材者にこう話すからだ。

「椎名さんなら、いつも自宅にある事務所にいるから。椎名さんならしやべるよ」

敦子は自分の意思などおかまいなしに、あれよあれよと取材攻勢の渦に巻き込まれていく。

「テレビや新聞の取材の列が家の前にできて、ほんとに馬鹿正直に全部受けていたし、いっぺんにいろんなテレビ局が入ってきて、私、何もわかんないから、話してくださいと言われたら話していた。取材を受けるマニュアルも知らないし、断つていいというのも知らなかったし。

もう、「若いお母さん、イコール椎名さん」となってしまつて」

自分が映っているテレビを一度だけ、見た。

「病気だなんて思った。鬱になってたでしょうって周りからも言われたし。あの頃の私、感極まると泣いてしまう。そんなシーンばかりを流されて。今日は話だけ、撮らないって言ったのに。すっぴんの、化粧もしてないやつ。ひどい」

記者からの話で「勸奨地点」の情報が入って来る。とはいえ、当事者でありながら知らされる内容は、あまりにお粗末だ。

小国全体が避難になるのではなく、避難になる人とそうじゃない人に分けられるらしい、避難になると赤十字の避難6点セットと住む場所を与えられるらしい……、結局、伊達市から小国の住民全体に対してきちんとした内容の説明が行われなのまま、事態だけが進んで行く。

敦子たち小国小学校のPTAは、「とにかく、お母さんたちの声をまとめて、市に訴えよう」と動き出した。そして、6月17日のPTAの役員会で次のことを決めた。

「保護者の意見をまとめないといけないから、保護者会を20日の月曜日に開こう。その結果をもって、市長への要望書を作成して、市長に直接訴える」

6月19日、この日は日曜。椎名夫妻は子どもと愛犬を連れ、宮城県に保養に出かけていた。週末はできる限り、汚染のない場所で子どもたちを犬と一緒に思いっきり遊ばせようと、一そろって車で出かけるのがいつのまにか家族の習慣になっていた。

帰り道、敦子の携帯に役員の母親から電話が入る。相当、焦っている様子だった。

「私を取材している、NHKの記者が言うの。明日にも決まるらしいって。だから、すぐに集会を開かないとだめだから。あっちゃん、すぐに帰って来て」

「だって、予定は決めてるよ。明日の夜、保護者会をやるって。会場は週末には取れないか

ら、月曜にやるって決めたじゃん」

「だめだよ、そんなの。明日にでも決まるかもしれないんだよ。だから、今日、やらないと。場所はあたしが取るから、とにかく早く帰ってきて」

小国へと急ぐ帰り道、また電話が入る。

「あっちゃん、19時に集会所を取ったから。そこで集会を開くから、急いで来て」

半信半疑で集会所に行った敦子が目にしたのは、敦子を取材していたのは別のNHKのクルーたち。テレビカメラや地元紙記者が待ちかまえる中、「はい、あっちゃんはここ」と座らされたのは、会見のテーブルの中央席だった。

「あたしは、PTAの会長でも副会長でもない、ただの役員。そもそもお母さんたちの声をまとめてから、市に訴えるというつもりだったのに、もうぐしやぐしや」

この場に地元選出の市議、菅野喜明も呼ばれていた。喜明にとってもその呼び出しは、唐突すぎるものだった。

ちなみに敦子たち母親にとって菅野喜明という市議は、「私たちの思いをちゃんと聞いて受け止めてくれた、たったひとりの人」だった。喜明は言う。

「椎名さんはかわいそうにいきなり、『あんた、代表やれ』と前面に出されることになった。

学校も通さずに、テレビ局とか新聞社を呼んで大々的にやったものだから、学校教育課は『P

TAの決起集会だ』と怒り心頭になった。やり方が下手だったと思う。いきなりマスコミとい

うのは、行政は嫌う。だから教育委員会は最初から聞く耳持たずで、全面对決になってしまっ
た」

それでも当時、PTAの母たちはそれぞれ分担して手際よく動いていたという。敦子はこう振り返る。

「みんな、よくこんなに動けるなというぐらいだった。緊急、緊急の連続だったのに。市長に要望書を出したいと校長先生に相談したら、住民の一番上の人の声が反映されるというので、下小国と上小国の区民会長さんに連絡を取って、月曜の会議に参加してもらおう段取りもした」子どもを全員、避難させてほしいという点では母親たちは一致したが、敦子の最大の疑問である「ここに住んでいいのかどうか」については、誰も触れない。

「あとは、あっちゃんか思ったように書けばいいよ」と、一方的に任された。

「こわかった。そうやって、いろんな負担が全部、自分にきた。マスコミの取材殺到も何もかも、全部が急展開。好きに書けばって、『それ、みんなの意見じゃないよね』って言われたらどうしようって、すごい不安だった」

23日、両区民会長と一緒に敦子は伊達市役所に出向き、市への要望書を提出した。

「お母さんたちはみんな行けなくて、PTAはあたしだけだった。喜明さんが怒って、『椎名さんだけに任せるのはひどすぎる、誰か来ないのか』って言ったので、急遽、誰か、ひとり来たとは思う」

忙しくて会えないはずだった市長に、この時、なぜか会えた。敦子は思いの丈を訴えた。しかし、市長から返ってきたのは……。

「梁川はいいよ。梁川がいいんじゃない?」

そういうレベルじゃ、全然ない。

伊達市北部に位置する梁川町一帯は、伊達市の中では線量が低いエリアだ。4月5日に公表された梁川総合支所前の線量は、0・76マイクロシーベルト／時。小国よりは確かに低い。だが、年間1ミリシーベルト以上の追加被曝をする値だ。放射性物質が降ったことに変わりはない。梁川で砂遊びができ、花を摘んでその蜜を吸ってもいいかといえ、あり得ない。「子どもを守りたい、子どもに線引きしてほしい、地点ではなく、地域にしてほしい」と、思いの丈を市長にぶつけたんだけど、全然響いていない。全然ダメだ。す、すごい疲れて帰ってきた」

敦子たち小国の母親たちが訴えたのは、「子どもたちは平等であってほしい」ということだった。だから「地点」ではなく、「地域」にしてほしいと要望したのだ。

『地点』になると、避難できる子とできない子が出てきてしまう。それは親としてあまりに切ない。『地域』だったら小さい子から高校生まで、避難したいと思った子が避難できる権利を与えてもらえる」

敦子の母としての必死の訴えを聞く前に仁志田市長はすでに、「特定避難勧奨地点」の指定を望むという市としての考えを、きつぱりと国に伝えていた。

「『特定避難勧奨地点』に係る協議経過」

(伊達市)

平成23年6月20日(月)、18時

現地対策本部・佐藤室長 来庁

(中略)

〔調整課題〕

国は、住居単位で特定したい。伊達市は、小集落（町内会）を希望
石田坂ノ上、八木平地区は、「計画的避難区域」に準じる地域として伊達市は支援して
きた経緯があり、仮称「特定避難勧奨地点」の指定を望む。

この同じ会合を、国はこのように記録する。

「伊達市との打ち合わせ概要（特定避難勧奨地点）」

日時・平成23年6月20日（月）18時～19時30分

先方・伊達市 鳴原副市長、佐藤市民生活部長他（途中から仁志田市長も同席）

当方・現地対策本部 佐藤室長、渡邊

・指定の単位

伊達市としては、小集落（町内会）単位での指定をお願いしたい。具体的には、霊山町
上小国中島、本組、下小国松の口、山下、西組、石田坂ノ上、八木平、月舘町月舘相葭の
8つ。全部で246世帯。

・その他 仁志田市長の発言

住民が自分で判断する本制度は大変良い。評論家が「国は無責任」と言うが、現状がわ
かっている発言だと思う。

乳幼児や子供への影響については、住民も部外者も敏感になっており、「一時疎開してはどうか」と言ってくる者もいる。今回の地点指定を「妊産婦や乳幼児の健康を考えて」という説明は、大人も子供も20ミリシーベルトという基準を置いている以上困難。我々も建前を崩していない。地区の指定についても、「基準があつてやる話で、あそこもここも」という訳ではない」と説明している。

子供の問題については、どうしても必要ということになれば「避難したい人はバツサリ網をかける」といった別の対応を考えた方がいいかもしれない。

伊達市幹部は「町内会単位で」と国に訴えているにもかかわらず、市長はむしろ、国の方策を歓迎し、「あそこもここも」という訳ではない」と、国の意向を先取りしているかのようだ。

6月28日、小国小学校体育館。特定避難勧奨地点の設定まであと2日となった夜、伊達市は初めて、小国地区全住民を対象にした説明会を開催した。小国の住民たちが詰めかけた体育館は立錐の余地もないほどで、今回はとくに若い母親や父親たちの姿が目立った。マスクをした若い父親がマイクを持つ。

「地点か地点じゃないかという、線引きをしてほしくないんです。小国地区全体が、すでに汚染されているわけじゃないですか」

今度は若い母親だ。

「もしここに残った場合、どんなリスクを背負うことになるのか、教えてください」

答えたのは、仁志田市長の横に座る、国の原子力災害現地対策本部室長の佐藤暁。

「普通に生活していただける分には、国として制約を設けるものではありません。普通にお暮らしいただいて問題はありません」

普通に？ 避難か避難じゃないかの瀬戸際に立たされている小国の住民に、国は「普通」という言葉を投げつける。今の小国のどこに「普通」があるのか。もつとも、遠い言葉ではないか。バカにしてんのか！ 瞬時にそう思った住民は1人や2人ではない。

敦子がマイクを持って立ち上がる。意を決したように、一息ついて話し出した。

「地点が設定されて、ああ、こんなに待っても、選ばれた子どもしか助けてもらえないんだって、そうなるのが一番悲しくて……」

会場から拍手が起きる。母親たちが大きくうなづく。それは、偽りのない思いだった。もし自分の子どもが、助けなくてもいい子どもとして分類されてしまったら……、思っただけで涙となる。それは悔し涙か、怒りの涙か。涙を振り払い、敦子は気丈に尋ねた。この制度を自分たちに強いるうとしていく国に、もつとも聞きたいことを。

「地点に漏れても、その子どもたちを守るために、国はちゃんと手当てをしてくれるのでしようか」

答えは、感情のかけらもない冷酷なものだった。

「放射線被曝で健康影響が将来的に確認される場合、因果関係を含めて整理されるべきことですが、この場で言いにくいのですが、最後は司法の場の話になる可能性もあります」

瞬時に会場は凍りつく。「もう、何を言っても通じない」とばかり、諦めなのか憤懣やるか

たない自嘲なのか、呆れ果てたような苦笑いの連鎖が起きる。

国はこの場で司法を出してくる。不満なら勝手に裁判でも起こせばいい、国は知らない、つまりはそういうことなのか。この国の本音はそうことなのか。敦子ははっきりとわかった。「最後は司法の場でって、それで前向きに生きていけるのか。私たち、好きで浴びたわけじゃない。低線量被曝がどんな影響を与えるか、誰もわからないという。その中で前向きに生きる、病気になっても誰も責任を取らないって、無理でしょ。リスクは私たちに振って。普通に生きててもがんになるって、バカにしてる。食べ物でがんになるのは自分の責任、でも原発は私の責任じゃない」

これで、終了となるはずだったその時、会場に大きな声が響き渡った。巨漢を震わせ、防災服姿の菅野喜明が腹の底から吠えた。

「ホットスポットが沢山あるんです！ はっきり言ってここは、計画的避難区域にするべき場所なのではないですか！」

そうだー！ 会場から一斉に拍手が起き、人々も吠える。

「なんで、低いところばかり測ってるんですかー！ いい加減にしろー！」

そうだー！ 会場の住民が声を上げ、手を叩く。これこそ、住民総意の固い思いだった。

「子どもも産めない！」

会場にいた、早瀬道子も母親たちと一緒に大声で叫んでいた。

国に激しい口調で抗議した喜明はその後、先輩議員から大目玉を食らったという。

「君にも将来があるんだから、そういうことをしてはいけないよ」

住民の思いや母親たちの切なる願いも虚しく、6月30日付けで「特定避難勧奨地点」が設定された。

伊達市霊山町上小国の一部 30地点 (32世帯)

伊達市霊山町下小国の一部 49地点 (54世帯)

伊達市霊山町石田の一部 19地点 (21世帯)

伊達市月舘町月舘の一部 6地点 (6世帯)

小国地区で指定となったのは79地点、86世帯、310人。ちなみに下小国・上小国合わせて全426世帯、1389人のうちのほんの一部、多くは小国にそのまま取り残された(11月25日には、霊山町と保原町の13地点「15世帯」が追加指定)。

全校生徒57人の小国小学校で、「地点」となり避難の対象となったのは21人。

「子ども」は優先して、避難対象とさせるのではなかったか。少なくとも、伊達市は「子ども」を小学生以下としていたはずなのに。

小国小学校でも石田小学校でも霊山中学校でも、児童・生徒は2種類に分類されることとなった。敦子は怒りを隠さない。

「57人中、21人。そういうのが成り立っていいのか。絶対にあり得ない。小国小という限られた人数の中で分けられちゃったというのが、本当に人をバカにしてる。ここで生きて行く私た

ちのコミュニケーション、どうしてくれるの？ 普通に会うでしょ。参観とかで」敦子も高橋佐枝子も、指定から漏れた。佐枝子の次男・優斗は少なくとも、事故当時は小学生だったのだ。それが「地点」設定時には中学生になっていたから、対象外だというのだろうか。

のちに佐枝子の友人で、中高生の子どもを持つ親たちに話を聞いたことがあった。母たちはみな、息子や娘たちが半ば、自暴自棄になっていると嘆いた。

高校生の息子がこう言っつて、母に反抗する。

「うっせーな！ 気をつけろとか、放射能のこと、いちいち言うな。俺はどうせ、結婚できねえんだから、じいちゃん作った野菜を食うぞ！」

中学生の娘はきっぱりと言う。

「だって、私、結婚できないから。もう、どうでもいい」

市議の菅野喜明が、「文部科学省及び米国DOEによる航空機モニタリングの結果」を示す。原発から80km圏内のセシウム134、137の地表面への蓄積量の合計が色分けされたものだ。

4月29日と5月26日のモニタリング結果には、小国地区にセシウム134と137の地表面への蓄積が100万〜300万ベクレル/m²を表す、「黄色」の飛び地がくつきりとある。これは飯館村と同じ色だ。

それが7月2日のものになると、小国から「黄色」の飛び地がなぜか消え失せ、30万〜60万

ベクレル/m²を表す薄いブルーと化している。

「あれ、小国は飯舘村より急に2段階下のレベルになっている。ずいぶん下がったんだと思っ
て測ると、高いんですよ。それがこの年の11月5日の計測結果のものだと、また元の黄色に戻
っている」

7月初めから11月初めまで、この4ヶ月の間に何があったのか。

6月30日に、小国には「特定避難勧奨地点」が設定されている。これが、キーとなっている
のは間違いない。

その後、かつて小国村の一部だったが福島市に編入された大波地区でも、住民たちは小国と
同じ汚染状況である以上、小国同様、「特定避難勧奨地点」の設定を求めたが、ついに認めら
れることはなかった。大波地区に隣接する、福島市渡利地区も同様だった。

喜明は、こう見ている。

「問題は、県庁です。小国から県庁まで直線で7キロ、裏道を使えば20分で行ける。ここを計
画的避難区域にしてしまおうかが、県と国の悩みの種だった。まさに、小国は県庁の喉仏です
よ。小国を計画的避難区域にすれば、渡利地区だって同じぐらいの線量ですから、ここもそう
せざるを得ない。こうして避難が福島市に及んだら、何万人もの人間を避難させないといけな
くなる。その人たちをどこに避難させるのか。当然、県庁も所在地を動かさざるを得ない」
小国はすなわち、福島市の防波堤だった。

福島市も面的な避難が必要なのだという事態に至らせないために考え出された、それは苦肉
の策だった。

「心の除染」という虚構

黒川祥子・著

発行：集英社インターナショナル（発売 集英社）

定価：1,800円（本体）＋税

発売日：2017年2月24日

ISBN：978-4-7976-7339-5 C0095

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)